

The Bulletin of the Faculty of Global Communications

Cosmos



同志社大学グローバルコミュニケーション学部機関誌

Vol.2

2013年3月

cosmos ['kɒzmos]

—①よく秩序づけられた宇宙。思考体系。

②キク科の観葉植物。

…花言葉 「調和」

cosmo- ['kɒzməʊ]

—（接頭語） 世界や宇宙に関する。

私は一つの可能性です。

私たちは無限の可能性です。

限り無く広がる世界の中で

調和をもたらす存在に成らんことを願い

これを題名とします。

References

Oxford Dictionaries. (<http://oxforddictionaries.com/definition/cosmos>)

流 希望 海 個 白 会

忙

界 実

道 進

動 漢

未

樂 波

交

輝 友 際

努 空

笑

Cosmos

Vol.2

— これらの漢字は、GCの学生たちが、
グローバル・コミュニケーションを
漢字一文字で表したものです。—



はじめに

この度はグローバル・コミュニケーション学会発行の学部機関誌 *Cosmos* 第二号を手にとっていただき、誠にありがとうございます。*Cosmos* は、多くの方々に広くこの学部のことを知っていただくため、また、学部内の学生への情報発信を目的に、昨年の学部の開設とともにスタートいたしました。

グローバル・コミュニケーション学部は「世界に通じる対話力」を合言葉に、単に外国語ができるだけではない、グローバル社会で要求されるコミュニケーション能力を言語・文化・社会など多角的分野から育成することを目的とした学部で、「英語コース」、「中国語コース」、留学生のための「日本語コース」の3つのコースからなります。「英語コース」と「中国語コース」の学生には二年次に約一年間の海外留学が必修となっています。授業も充実しており、成長しない訳がないというほどの課題の多さに日々格闘しています。

入学当初の私にとって「グローバル」という言葉は、どこか現実味のない、別世界のもののようでした。しかし、この学部で勉強していく過程で、少しずつ、自分の身に「グローバル」なことが起こり始め、その言葉がだんだんと自分のものになっていきました。ネイティヴの先生が多くいらっしゃるおかげで外国人に対して以前のように身構えなくなり、外国語と深く関わった職業についていらっしゃる先生方がフレンドリーに接してくださるおかげでグローバルな仕事の具体像を知ることができました。毎日のように通う学部専用の自習室では「中国語コース」の学生たちが発音の練習をしていて、いつも刺激を受けました。“世界から見た日本”を学ぶ授業では、想像もしていなかった日本のイメージを知って、どんな物事も多角的に考える大切さを学びました。このように、この学部には異なる文化、言葉、民族がひとつの空間にある「グローバル」が当たり前であり、そしてそのような話題を毎日話し合える仲間がいます。

そんな学生たちが作ったこの冊子には、学部、教授、仲間たちに、自分の未来に、後輩に、母国に、海外に向けられたそれぞれの熱い思いが込められています。この冊子に携わった人は、学生、教授含めると30人程になりますが、活動が学期末の試験やレポートの準備と重なったこともあり、時にはみなさん、自分の睡眠時間を削って原稿を仕上げました。対談やアンケートに協力してくださったGC学部の皆さん、そして学生とは比べられないほど忙しいにもかかわらず時間をつくっていつもの確かな助言をくださった先生方、本当にありがとうございました。

最後に、*Cosmos* 第二号を手にとってくださったみなさん、ありがとうございます。少しでも新たな発見や考え方がみなさんの中に生まれると幸いです。では、最後までお楽しみください。

英語コース一回生 廣江 華蓮

表紙デザイン 後藤 友莉
内表紙デザイン 谷口 綾

Cosmos 第2号

目次

対談

- アジア3ヶ国集結！ 日中韓学生対談 4
GC から世界を変える コース学生対談 10

日本語コース

- 日本語コース授業体験 20
留学生によるエッセイ・コラム 23
節約・慎重・笑顔——私の目でみる日本 24
バラエティーに富む日本 26
日本から学べること 28
日本での留学経験で変化したこと 30
留学生に読んでもらいたい日本理解につながる書籍紹介 ... 32

英語コース

- Study Abroad 体験談 34
検定対策
TOEFL って何？～教えて、先生!!～ 40
少し気になる!? GC 学部生 “TOEFL” の本音!! 42
英語の検定試験は TOEFL だけじゃない!! 45

中国語コース

- Study Abroad 体験談 復旦・台湾師範大学編 48
北京大学留学生スピーチ・コンテスト体験談 54

イベント報告

- 外国語で遊びませんか?! クローバー祭 GC 学部イベント ... 56
グローバル・コミュニケーションとは何か? 57
異文化交流について、子供たちから学んだこと 58
「個人」という単位から見える国際交流 59

ア ア ジ 3カ国集結!

このコーナーでは、日中韓の学生たちが須藤先生の司会をもとに日本人の立場、中国人の立場、韓国人の立場、それぞれの立場にわかれていくつかのテーマについて対談します。現在、日中韓の3カ国間には政治面や歴史の面でさまざまな問題があります。しかしそのような国家・外交レベルの対立や問題の壁を越えて、私たちは今どのような相互関係を築いていくべきなのか、特に私たち民間にできることについて、なにかヒントを得られたら良いという思いでこの対談を企画しました。

【出席者】

司会：須藤 潤 先生（すどう じゅん：日本語コース）

コーディネーター：山田春菜（やまだ はるな：英語コース）

周林京（しゅう りんきょう：日本語コース）

対談者：日本代表 —— 山田春菜、今井優香（いまい ゆうか：英語コース）

中国代表 —— 周林京、王冕（おう めん：生命医科学部3回生）

韓国代表 —— 朴炫宣、金雲喬、李賢智

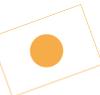
（ぱく ひょんそん、きむ うんきょ、い ひょんじ：日本語コース）

内容

- 自国のアピールポイント、優れているところ、好きなところ
- 相手国の良いと思うところ
- 日本に来て、自国と違うと思ったところ、びっくりしたところ
- まとめ、私たちの未来

各国の“お国自慢”

— 日本のお国自慢 —



日本代表（以下：J） - 「やっぱり、礼儀があるところとかマナーが良いってところが日本の良いところだと思います。」

須藤先生（以下：須） - 「そのマナーの良いところで、普段よく感じるところってどんなところですか？」

J - 「電車を待っている時に、皆ちゃんと列に並んで待っているところとか、マナーの良さを感じます。電車も時間通りに来ますね。また、店員さんもマナーが良いとよく言われているように思います。」

須－「みんなはマナーを普段から意識しているのですか？」

J－「意識は特にしたことなかったけど、テレビ番組とかで、ほかの国と比べられているのを見たときに、あ、日本ってマナーすごく良いんだなと感じました。それと、日本では時間もちゃんと守らないといけませんよね。日本はけっこう時間に厳しい。」

須－「そのようなことって、日本に来て感じましたか？」

韓国代表（以下：K）－「時間に厳しいけど、遅いです。締切も長いし、配達も遅いし、守ってもらわないと困ります（笑）。」

須－「例えば？」

K－「スピードのことです。例えば、注文して、配達が届くのが1ヵ月後とか…。引っ越しして、ベッドとか家具とか届くのが遅いです。」

須－「確かにインターネット工事が一ヵ月後じゃないと予約できないとかありますね。」

J－「あー確かに、なるほど。」

K－「でも、だから前もって計画を立てられるってゆうのは、日本の長所だと思います。」

須－「コンビニとかデパートとか、街中の人とか、マナー良いですか？」

K&中国代表（以下：C）－「うん、いいと思います。」

—韓国のお国自慢—



K－「韓国の良いところは、みんな変化を恐れないところかな…。流行とか世界の流れとかにも早く対応できる場所とか、すごい良いところだと思います。まあ、たぶん、人口が少ないからそれがやりやすいのかもしれないですが。」

須－「具体的に、どんなことがありますか？」

K－「日本で感じたことは、日本ではiPhoneは4Sから流行ったじゃないですか、韓国ではその前から流行っていたんです。日本人は今使っている携帯がまだ使えるから、新しいのに変えないとか、物事に対してそう考える傾向があると思うのですが、韓国人は世界が熱狂している携帯がどんなものが知りたくて、自分も試してみたいと思って、携帯を変えます。」

須－「ほー、なんか好奇心が強そうですね。」

K－「そうなんです！」

須－「インターネットの世界でも、日本なんかよりずっと先に進んでいるようですね、韓国は。インターネットとかテクノロジーとか技術とかね…。」

J－「そういや、旅行に行ったときも、韓国だったらどこでもWi-Fiに繋がって便利でした。」



須ー「京田辺は全然携帯が繋がらないって、僕の教えている韓国人留学生が文句を言っていました。不平・不満を言うっていう授業の課題があったときに話してくれましたね。」

須ー「他になにかありますか？」

Kー「さっきも話題に出た、時間についてなのですが、韓国では何かを注文したら、大抵次の日には届きます。それは、自宅だけじゃなくて、他の場所に送るときも同じです。また、家の何かが壊れたときに、日本では修理する人がちゃんと予約した日に来ますよね、でも韓国では、“近くまで来たので、今時間がよければお伺いしてもいいですか”って電話がきて、予定よりも早く直してもらうことがよくあります。」

須ー「なんか機転がきくというか、臨機応変に対応してくれそうな感じですね。」

—中国のお国自慢—



Cー「中国は多民族の国なので、多文化に触れることができるところがおもしろいかなと思っています。また、中国人は行動が早いところや、メリハリがあるとも思っています。でも、中国は多民族・多文化なので統一するのが難しいです。」

須ー「多民族や多文化を感じるときってどんな時ですか？」

Cー「中国には100種類以上の方言があって、旅行するときに、結構言葉が通じないところがありますね。それにはびっくりしました、国内でもカルチャーショックっていうか…。」

Cー「あともう一つ、中国人は群れにこだわらないです。日本に来て、グループ作業とかが多いと感じたのですが、中国では一人一人で作業します。」

須ー「日本語コースの授業で、よくグループ作業させるのですが、なんかわかる気がしますね。」

須ー「まあ、でもそれぞれアピールポイントってありますよね。そしてそれが3か国それぞれ違うっていうのも興味深いですね。何かやるのが速いとか、行動が速いとか、日本は遅いとか、それはおもしろいですね。日本でなにか遅いって感じることはありませんか？」

Cー「簡単な作業なのに、長引いてるって感じます。でもそれは、正確であったり確実さを求めてやるという面で良い点だとも思います。日本は、速さを求めずに正確であることを重視しているように思います。」

私たちの未来、互いに学べること

—今回の対談を通して気づいたこと—



Kー「韓国も中国も日本も、どの国も独特な文化を持っているので、それをもっと生かすべきだと思います。日本はうまく発展していると思うのですが…。」

Cー「季節ごとに違うお祭りがあるということは、中国にはないので学びたいところです。」

Kー「なくなった韓国の文化とか、もったいないと思います。発展することだけに集中していて、

昔の文化は結構忘れられているのですが、日本は発展もしていてちゃんと文化も守れているところが良いと思います。」

須－「韓国は文化がなくなったりするのですか？」

K－「韓国はわざわざ祭りを作って、伝統的ではなくイベント形式で、遊ぶ日を作ったって感じがします。最近になって伝統が作り出された感じ…。でも、日本では祇園祭とかすごい伝統的じゃないですか。」

J－「祇園祭は確かに歴史が長いよね。」

C－「日本では、自然に夏に浴衣を着るじゃないですか。中国だったら、チャイナドレスを着て街に出たら、ちょっとおかしいです。」

K－「最近になって、若者たちが“私たちも韓服着ようよ”ってSNSで話したりしています。」

須－「どうです？日本って文化を大切にする国ですか？」

J－「日本人は日本人っていうアイデンティティーが強いのかな…。だけど、それが逆にこのグローバル社会で、もちろん進んでいるところもあるけど、遅れている部分もあると思うから、そういうところはやっぱり、韓国人の行動力とかを見習うべきやなと思いました。」

—GC 学生の「愛国心」とは？—



須－「よく自国の文化を大切にすべきといいますよね。ちょっと政治的な話になりますが、最近よく日本人は愛国心という言葉を使いますよね、それをどういう意味で使っているのか私もよくわからなくなるのですが、自分の国を愛する気持ちってどんな気持ちだと思いますか？」

C－「難しいですね…。うーん、自分の国は良いところもあるけど、ほかの国に自分の国の良いところを知ってもらいたい、理解してもらいたいというのが愛国心かなと思ってます。」

K－「あんまり考えたことなかったけど、自分は韓国人だし韓国大好きだし、なんか具体的には言えないんですが…。親がメキシコ人だけどアメリカで産まれて20年間アメリカで育ったという友達がいる、自分の国はメキシコだっていうほどにメキシコが大好きだと言っているのに驚いてわかったことなんです、その国に産まれて育ったからという理由だけで、愛国心は生まれにくいかなと思いました。」

須－「うーん、確かにそうですよね、愛国心とはその国に生まれて育ったという理由からのものではないですよね。どこかでその文化と繋がっていると感じるんでしょうかね。」

K－「難しい…。日本も韓国も日本人とか韓国人とかがほとんどだから、あんまり愛国心ということを考えるきっかけが今までありませんでした。自分の国にいただけだったら、愛国心ってわからないと思います。」

須－「私も、日本から一度も出なかつたら考えなかつたかもしれません。そういう意味では、このGC学部の学生は必ずみんなどこか違う国に行かなければならないので、その愛国心も考えるきっかけの一つになりますよね。」

—3か国が協力すると…—



須—「さあ、それで、この地域が将来どのようになるかについてなのですが、どうなるんでしょうかね。政治を越えてですよ…」

K—「うーん難しいです…」

C—「なんか、民間的な交流はもっとして欲しい…政治は抜きで…」

全—「うん！うん！」

C—「政治はどうなっても、民間の交流は続けるべきだと思います。」

須—「うん、それは絶対続けるべきですよ。じゃあ、民間としてどうやっていったらいいと思いますか？そこが問題になってきますね。」

J&C&K—「うーん…」

須—「今までたくさん話してきましたが、この3つの国の良いところを合わせるとどんなものができるでしょうか？」

K—「すごい強い力を発揮できると思います。」

C—「もっとグローバルな企業をつくるとか…。」

須—「そうですね。今話してきたように、例えば、日本にはマナーの良さや時間を通りに対応できること、韓国には好奇心が強く変化を恐れないというところ、またすぐに対応できるというところ、そして、中国は多民族ですし深い文化もありますし、一人一人自立していて、個々に対応できること。このようなところからどういう未来が見えてくるのでしょうかね。」

J—「確実にこれからこの3つの国は協力していくべきやと思いました。政治の部分だけを見ると、やっぱり問題とかあって、相手に悪いイメージを持ってしまってもめるというのは、すごいもったいないことやと思います。やっぱり政治抜きにして、それぞれの国の良いところをもっと見て行って協力したら、絶対にもっとアジアの力を世界に見せられると思います。」

須—「では、どんな協力をしていったらいいのでしょうかね…。僕も今日話していて、やっぱりどの国もそれぞれ特徴があるんだなとすごくわかったのですが、協力しようといってもお互い

どんな道具を持っているのかわからなかったら、さて何が協力できるのでしょうかってなると思うのですが、こんなにもお互いそれぞれ特徴があったら、なにか一つの仕事をするにしてもうまく分担できそうですよね。例えば、正確性を求めるのは日本人で…とかです。」



—カギは「国内」にあり?!—



須—「私たちは今日こうやってちょっとわかってきましたけども、一般の人や外国に行ったことのない日本人、韓国人、中国人は国にいっぱいいるわけですよね。そういうひとたちも含めてどういことができるのかな…。」

C—「小中学生にそれぞれの国の文化を体験できるような授業を作って欲しいです。」

須—「うん、そうなるといいですね。」

K—「海外公演とか…中国の京劇だったら小学校のときに韓国で家族と見たことがあります。これは中国の劇だっていう感じで中国の文化に触れてみて、すごく印象的だったのを覚えていません。でも日本のは見たことないです。歌舞伎とか…韓国で公演しないのですかね?」

須—「そうだね、そういう各国の独自の文化が自由に行き来できたらいいですよね。それも、小学校や中学校で教えられるようになればいいですけどね、しかし、そこにはいろいろ壁があるのがまた大変なんですけどね…。」

C—「音楽とかだったら国境がないので…」

須—「そうですね、今はインターネットとかがあるから、昔と比べればだいぶ普及しやすくなりましたよね。」

.....

須—「ここでまだ具体的に話がでないっていうのも、お互いが理解できるところまでいってないから、こうしたらもっとおもしろそうとかいうアイデアがまだ浮かばないのですかね。また、お互いの国が抱える人々をどう説得していくかといいますか…、意外と、国際交流っていうのは僕らのレベルであれば簡単にいくことかもしれませんが、国内にそれをどう普及していくかというのが大変なのかなって気がします。国際的な交渉っていうのは、このGC学部の学生や留学生にとっては得意な部分だと思うのですが、それを国の人たちにどう広めていくか、伝えていくかが重要で、そうじゃないと本当の真の国際交流にはならないわけですね。それがそれぞれの国にとって難しいところですかね…」

To be continued...

まとめ

日中韓の間にはさまざまな政治問題があり、なかなかその壁を乗り越えられないという現状があります。しかし、今回の対談では、各国それぞれの良い点に目を向けることによって、私たちは互いに相手国の素晴らしい特徴を知ることができました。この全く異なる3カ国の良い点を合わせ、協力すると、すごいことができるのではないかと気づいたとき、私たちはなんだか胸の高鳴りを感じました。その他にも学べたことはたくさんあり、国家の壁を越えた民間での交流はいかに大切であるかを感じることができました。

GCから世界を変える

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部は英語コース、中国語コース、そして留学生のための日本語コースの3つのコースからなっています。英語コース、中国語コースはそれぞれ一年間の留学を控えていて、日本語コースの学生はただ今留学中です。各コースを代表して、永田さん、木下さん、金さんの三人に集まってもらい、様々な点について対談してもらいました。みな留学というひとつの大きな目標を持った同士でありながら、違ったコースに属している中で生まれてくるだろう、考え方や意識の共通点、異なる点を知りたくて今回この対談を行いました。各コースの学生はどのような考えを持っているのでしょうか。対談の様子を記載しました。

【出席者】

コーディネーター：劉 瀟瀟（りゅう しょうしょう：日本語コース）⇒以下：劉
廣江 華蓮（ひろえ かれん：英語コース）⇒以下：廣
奥雲 茜（おくぐも あかね：英語コース）⇒以下：奥

対談者：英語コース代表 —— 永田 良也（ながた りょうや）⇒以下：永
中国語コース代表 —— 木下 菜里（きのした しおり）⇒以下：木
日本語コース代表 —— 金 裕晶（きむ ゆじょん）⇒以下：金



木下菜里



金裕晶



永田良也



(左から) 廣江・奥雲・劉

目次

- (1) 語学学習について
- (2) 困難について
- (3) 留学に対する強い思いについて
- (4) 日本語 / 方言について
- (5) コース間の接点について
- (6) GC 3コースについて

(1) 語学習得について

「言語は文化。言語が違うから文化も違う。」

廣 「金さんは現在日本に来て日本語を学んでいらっしゃるんですが、日本語コースの学生さんはみんなすごく日本語が上手なので、日本に来る前から勉強されていたことだろうと思います。韓国ではどのくらい日本語を勉強されていたんですか？」

金 「留学のために勉強し始めたのは高校2年生からです。だいたい一年ぐらいですかね。」

奥 「わずか一年でそれだけ喋れるんですね！すごい！」

廣 「ほとんどの中国語コースのみんなにとって、中国語はこの大学に入って初めて習う言語だと思いますが、木下さんは以前から個人的に勉強していたそうですね。」

木 「はい。個人的には興味があって3ヶ月くらい勉強していましたね。中国の大学に入りたいと思った時期もありました。」

廣 「英語と中国語を比較してみたことってありますか？」

木 「うーん…文法は似ているとか言うけど全然違う言語ですね。でも言語ってどう比較したらいいのでしょうか…」

永 「世界中にはたくさんの言語がありますよね。新聞で読んだ記事によると、例えば英語の come (カム) をドイツ語では 'コメ' と読んだりするなど、アルファベットを使う言語は読み方を統一しようという動きがあるみたいです。実現は難しいとは思いますが。」

奥 「言語が違うから文化も違いますよね。」

木 「言語は文化みたいなところ、ありますよね。」

永 「この学部には中国や韓国などいろいろな国から来た友達がいる、漫画が好きなのも沢山いますが、やはり言葉のニュアンスが違うので、元来の言語である日本語を勉強したいという友達も多いですね。日本語のニュアンスが英語じゃ伝わらない時があるように、やはり日本の文化をよく表せるのは日本語だけですよね。」

木 「でも、ニュアンスのギャップを埋めるためだけに言語を勉強しているのか、と言われると違う気がします。」

永 「では、なぜ中国語を勉強しているのですか？」

木 「私が中国語を勉強する一つの目的は、たくさんの人ととにかくコミュニケーションが取りたいから。中国で、英語を喋ることの出来ない人、中国語しかわからない人とコミュニケーションを取るには英語じゃ足りないと思ったんです。いろんな人と話して視野を広げたい、と思ったのが一番の目的です。」

廣 「世界が広がりますね。」

永 & 木 「世界は確実に広がりますよね。」

(2) 困難について

「一生勉強。言語の道に終わりなし。」

廣「皆さん、それぞれ英語、中国語、日本語を外国語として勉強している過程だと思いますが、それに当たって感じた困難などありますか？」

永「僕の海外経験は去年の夏に韓国に行っただけで、僕は学校も、ごく普通の中学校から進学校という一般的なルートだと思います。そんな僕が思うことは、英語が全然聞き取れない。そう感じるのは僕だけじゃなくて、たぶんほとんどの日本人が直面している問題だと思います。日本の教育が文法中心だということが一番の問題だと思います。でも、書いているものは容易に読めるし、英語が通じなかった時も文字を書いてコミュニケーションをとったりできたから、別に日本の教育を批判しているわけじゃないんですけど。」

奥「日本人に足りないのってなんだろう？」

永「僕自身、鍛錬すべきだと思っているのはリスニング力ですね。あと日本人って長期にわたる鍛錬を嫌がる傾向にあるような気がします。ダイエットでも、すぐに効果が出ることしかやりませんよね？それではいい結果を期待できないと思います。」

廣「木下さんは？」

木「同じ意味を持っているはずの言葉でも、感覚の違いにより意味の捉え方が異なることです。幅の狭い表現もあれば、幅の広い表現もあります。そんな中で自分が発した言葉が、現地の人に実際にはどのように伝わっているのか？に確信を持ってないことは、辛いですね。」

廣「なるほど…」

木「相手の感覚に寄り添おうとすることが外国語を習得しようとするということであり、その為には相手国の歴史、文化、社会を同時に理解しようとする必要があるのでしょう。一生勉強ですね。」

廣「一生勉強…言語の道に終わりってなさそうですもんね。金さんは？」

金「日本語をやっていて難しいと思うのはやっぱり漢字ですかね。なんとなく意味はわかっても読めなかったり、読めても書けなかったりすることが多いです。」

(3) 留学について

「現地で、現地の言葉を使って、現地の人とコミュニケーションを取ることが一番楽しいかなって。」

廣一 「金さんは、どうして日本語に興味を持ったんですか？」

金一 「日本という国に興味があったからです。普段面白がって読んでいた漫画が本当は日本の漫画だったり、普通に使っていた単語が占領の時に日本から韓国に入ってきた単語であったりすることを分かった時に、興味が湧いてきました。そして、日本の歌手に興味を湧き、日本の文化により多く接するようになりました。そこで、日本という国を理解するためには、私の好きな人たちが言っていることを通訳ではなく、そのまま受け取るためには、日本語を勉強する必要があると思い、日本語の勉強を始めました。」

奥一 「そうなんです。ほかの国の人が日本に興味を持っていてるところを目の当たりにすると、なんだかとても嬉しいですね。」

廣一 「永田くんは、どうしてこの学部に入って、大学でも英語を勉強しようと思ったんですか？」

永一 「僕たちの世代は中学生の頃から6年間も英語を学習しているのに実際話せる人はそんなにいませんよね。自分でできる勉強だけじゃ限界を感じてきて、高校生の頃から一年留学を考え始めるようになりました。ただ、英語を習得するだけでなく他の文化にも触れたいとも思いました。世界を旅するのが僕の夢の一つであり、それも含めて留学に行きたいと思い、この学部を選びました。現地の人とコミュニケーションを取りたいというのも一つの理由ですね。現地で、現地の言葉を使って、現地の人とコミュニケーションを取ってというのが一番楽しいかなと。今年の夏に韓国に行ったのですが韓国の学生と現地で交流したのは、すごく貴重な経験になりました。日本で韓国人と交流するのと、韓国で韓国人と交流するのはやはり違うなと感じました。」

木一 「私も同じ意見です。中国には2回ほど行ったことがあるのですが、それがきっかけでこの学部に入りました。中国はすごく混沌としているイメージがあるのですが、でも国としてすごくまとまっているところにどんな秘密が隠されているんだろう、と純粋に知りたいと思ったんです。政府全体のことでありますが、民間の人と交流することで、もっと中国について理解できるんじゃないかと。なんで中国かと聞かれたら…わくわくしたからですね (笑)」

永一 「日本・韓国・中国のこの三カ国は歴史を語る上でも重要な点ですよ。その時に、多くの日本人が、中国に対して悪い事を言っていますが、実際中国のことをどれだけ知っているかと問いかけられたらきっと誰も何も答えられないと思うんです。僕は中国語を勉強していますが、中国に限らず自分の勉強している言語を話す国で過ごして文化を感じるというのは、その国を理解する上でとても良いことだと思います。」

木一 「日本で受ける情報とは絶対違いますもんね。その国の言葉でその国の人と交流し、理解することは真実を知る上での一番の正攻法であることは間違いのないと思います。」

金「私も同じような意見です。テレビとか漫画でしか見る事が出来なかった日本に、実際に行ってみたくて思ったのが一番の理由です。もちろん、旅行とかでも経験することは出来ると思う人もいるかもしれませんが、私は、旅行みたいな短い期間では「本当」の日本を分かることは出来ないと思って留学を決めました。そして、母国の大学での日本語・日文学科に進学するより、カリキュラムも含め、留学の方が将来的にも良いと思ったからです。」

奥「日本に留学したいと言ったときは高校生だったわけですよね？その時の周りの反応ってどんなものだったんですか？」

金「私の場合は、日本に知り合いとかが全く無かったので親からも猛反対されていました。そして、国内大学向けの進学校で一人だけで留学のための日本語勉強に集中していましたが、母国と比べたら日本はかなり物価の高い国というイメージがあるので、先生方から「あんたん家、そんなにお金持ち？」と皮肉を言われたこともありました(笑) 経済的なことや生活的なこと、将来性など、全てにおいて何一つ確実なものが無かったから、周りの大人の9割が反対と心配をしていたと思います。余談ですが、周りの反対に反発して、心配をかけてまで来た留学だったので、最初は弱音を吐くこともはばかれて…でも今は、ちょっと辛いときもあるけど、留学していて良かったと思います。」

廣「壮絶ですね。二人は何か留学に対して不安とか、ありますか？ちなみに私は不安でいっぱいなんですけど(笑)」

木「本当に現地できちんとした生活を送っていけるのか？という自分自身への不安はありますが、留学に行くことについての不安は不思議と無く、純粹に楽しみにしています。一体何があるのだろう？一体何が起こるのだろう？そんな中で、自分はどんな影響を受けて変化するだろうかとわくわくしています。また、留学先では留学までの間にインプットした知識を、現地でアウトプットすることで、現状をより深く理解し、将来それに乗じたアプローチがとれるようになることを期待しています。」

永「僕も不安は全くありません。高校生の時から思い描いてきた留学。そして、世界を旅する能力をつけることができるので、木下さんと同じようにわくわくしています。中学生のときに「俺は世界を変える！」と言っていたらみんなにバカにされていましたが、今はそんな夢を真剣に聞いてくれる人がたくさんいます。僕は、自分なりに世界に根付く偏見や、私たちが知るべき歴史などの真実を研究していて、例えば一日一冊は何かしらの本に手を付けています。僕の意見としては、ある人種、民族についての偏見はなくなることはあると思いません。大事なことは、一人でも多く真実を知り、歪んだ考えをなくすことです。僕は日々学び感じたことを人に伝える努力をしています。中には、お前は自分のことしか話さないなどと言う人もいたりしますが、ほとんどの人が興味を持って僕の話聞いてくれます。世界と真剣に向き合おうとしている友人がたくさんいると、本当に世界を少しでもいい方向に動かせるのではないかと思います。留学では、英語を学ぶのは当たり前ですが、自分の世界を広げる、日本にいては見ることができない世界を感じる絶好の機会だと思っています。」

(4) 日本語 / 方言について

「方言を理解する＝そこに住む人を理解する」

廣ー「実際日本に来て、周りの日本人と話していると、関西弁が多いと思いますが、その点はどうですか？戸惑ったりしましたか？」

金ー「最初半年ぐらいは全然聞き取れませんでした。また、日本語を一から勉強するつもりで、留学生生活を過ごしていました。毎回、「これはどういう意味なんだろう？」って思っていました。」

廣ー「今はどちらかというと標準語を話していますよね？」

金ー「どうなのでしょう。友達と話しているときは関西弁かもしれません。今は逆に標準語が出てなくて、大変な思いをすることがあります。」

廣ー「中国語コースと英語コースの二人も広い国に留学するわけだから、もちろん幅広い方言があるとします。戸惑うこともあるかと思いますが方言についてはどう思いますか？」

永ー「そうですね。やはり普段慣れている英語と異なる表現やイントネーションに戸惑うこともあると思います。例えば日本の文化だったら多少分からなくても笑顔で相槌を打っていれば何事もなかったかのように流れを作ることが出来る場合もありますけど、例えばアメリカでは分からないままで置いておくことが失礼になってしまいますよね。難しいかもしれませんが、留学先では日本にいた時とは自分のスタイルを変えて、分からないことは一つ一つ聞いていこうと思っています。」

奥ー「中国語はどんな感じですか？今勉強しているのは標準語だと思いますが。」

木ー「そうですね。今は標準語である北京語を勉強しています。でも私はその地域の方言に合わせないかもしれません。標準語のままいるかもしれませんね（笑）。でも方言を理解することはそこに住んでいる人を理解するということですよ。親しみも湧きますし。」

永ー「中国は世界的に見ても方言の違いが多い国ですから、やはり大変ですよ。」

木ー「全てをマスターすることはできないと思っています。だから基本の標準語をしっかり固めてから、方言にも触れていけたら、と思っています。」

(5) コース間の接点について

「みんなでパーティーやディスカッションなどしたいですね!」

廣「私たちは「グローバル」という名のついた学部で勉強していますが、実際コースが違うと、ほとんど関わりが持てない、というのが現状だと思います。自習室も GC の人だけが専用で使えるものだから、その部屋には GC の人しかいないというのに、そこでコースの違う新たな友達をつくる、というのはなかなかしづらいですね。ちょっともったいないと思いませんか？もっと他のコースの人と交流したいけれど、なかなか機会がありませんよね。機会を作るためにはどんなことをすればいいと思いますか？」

永「学部で頼るのではなく自分達で輪を広げていって定期的にパーティーなどをするのが良いと僕は思います。先生に聞いたのですが、去年は英語コースの中で頻繁にパーティーみたいなのとかやってたらしいんですね。そういうのを僕たちもやったらいいと思います。」

廣「楽しそうですね。」

永「小さい学部なんで、何人かのハブ（知り合いがたくさんいる人）で協力して連絡を回していれば全員を網羅できると思うんです。クラス単位でメールを回していてもいいと思いますし。それだったら結構簡単に予定組めると思います。」

廣「いいですね。私が初めのころ自習室にいたときは、自習室にいる人は絶対みんな GC の人だから話しかけたいな、と思っていたのですが、日本語コースの人とかは特に熱心に勉強されているイメージがあって話しかけづらかったんですけど、そのへんどうですか？」

金「留学生からしたら、逆に声かけていいのかな？と思ってしまう時があります。」

永・木・廣・奥「え！全然声かけてください！声かけて来てくれた方が嬉しいです！」

金「私たち留学生は日本が好きでこの国に来ましたが、もしかしたら日本人にとっては外国の人が勝手に来ただけで思っているかもしれない、などと思ってしまいます。私は韓国から来たのですが、もし韓国に嫌な気持ちがあったら、と考え、声をかけるのをためらってしまいます。」

永「全く気にしないでください！ここは国際系の学部で、他の国に興味をもっている人や国際的な視点を持っている人が多いから、そのような感情を抱く人は少なくともこの学部にはいないと思います。」

木「実は私も国籍が韓国なんですけど、私も、相手にこのことを言ったら嫌な顔をされるんじゃないかと考えたりするので、このことは難しいですね。相手がどう考えているかなんてわからないですもんね。」

廣「たとえその国に、少し嫌な感情を持っていたとしても個人個人に対しては別だと私は思っていて…生まれた国は仕方がないけど、その人はその人だから仲よくなるのに国籍は関係ないと思います。」

永「国と人とは、ある意味関係ないと僕も思いますね。国と国との関係をまったく無くすることはできないかもしれないけれど個人個人の関係はそれとは全く別のものだとも僕も思いますし、僕の調査に答えてくれた友達もそう言っていました。」

劉「やはり個人差はあるんですね。」

永「確かに、個人差もあるとは思いますが。」

劉「私の友達が日本でテレビで中国の状況について報道されているのを見て、すごく怖くなって中国に行きたいと思わなくなったと言っていました。」

永「デモのことですか？」

劉「平和堂が中国の湖南省で壊された報道です。それを見たらみんな怖くなるんですかね。でも、それはほんの一部です。中国人みんながそういう気持ちを持っているわけではない。偏見によって失業した人もいます。極端な思想を持った人もいますが、私たちは偏見をもたないようにどんなことをすればいいんですかね。」

廣「国と人とは違うって分かっているけど、やっぱり中国や韓国を日本は昔占領してたわけだから、ちょっと遠慮しちゃおうとか、今でも戦時中の問題が出てくることもしばしばあるし日本人として行きにくい、という気持ちが私の中ではちょっとありますね。」

永「先ほども言ったように、僕は今年の夏に韓国に行って現地の学生と交流したのですが、僕は純粋に行きたいという気持ちでした。実際韓国に行ってみると、その時ロンドンオリンピックで日韓のサッカーの試合があったり、韓国大統領が竹島上陸した時だったんですけど、僕の韓国人の友達は僕たちに対して何も言わなかったし、ずっと良い関係のままその8日間プログラムを終えることが出来ました。その時に、本当に日韓の関係を良くしたいと思っている人はたくさんいるのだなあと、ますます日本と世界との関係をもっともっと良くしていきたいなと感じました。」

金「日本の人を“信じて良い”と断定するにはやはり時間をかけるし、慎重になります。永田さんのように、海外とか留学生に興味ある人だったら先に声をかけてくれるので、そう言う人は安心ですが、同志社にいても陰口を言われたこともあったので…」

劉以外その他「え!？」

金「陰口…はみんな一回は言われたことがあります。」

廣「一回でもそんなことあったら萎縮して次から声かけられなくなっちゃいますよね。」

木「同志社には外国人の方も少ないです。日本は、アメリカのように多民族国家ではないので、外国人というだけで一線を引いてしまっている部分はあると思います。」

永「日本は単一民族だという人もいますが、僕はそうは思いません。日本は、古来から韓国や中国からいろんな人が来て文化も混ざり合っているし、それこそ血もどんどん混ざり合ってきたと思うんです。僕たちの祖先が韓国や中国から来たかもしれないことを考えると、何も排他的になる必要はないと思うんです。実際偏見とかをなくするのは難しいと思いますが、僕の夢のひとつに、国と国との関係を改善することというのがあって、ちょっと恥ずかしいけどそういった仕事に就くのが目標です。このようなディスカッションをGCのいろんな人としたいですね。」

廣－「さっきも言ったようにパーティーとかしたら良いかもしれませんね。」

木－「でもいきなりパーティー、というのは少しハードルが高いように感じませんか？例えば GC 全体でタイムスケジュールとか組んで、火曜の 10:00～11:00 はこの話題について話す、みたいなことをすれば、お互いの国のことももっと知れると思うし、GC 全体の空気ももっと良くなってくると思います。」

廣－「いっぱい話したら仲良くなりますしね。」

木－「そうですね。話題は、好きな食べ物みたいな軽いのから、国際問題とかまで用意して…」

永－「GC の自習室の少し奥まったところあるじゃないですか？あそこだったら、みんな中国語の発音の練習とかもしてるくらいなんで邪魔にならなくて、いいと思います。自習室に貼り紙とかして、来れる人、興味ある人だけ何人でも、来たらいいと思いますし。あそこは机も自由に動かしてセッティングもしやすいから…すごく面白いと思います。」

木－「今は何かこうやって思いついたこと話してるんですけど（笑）」

永－「GC のみんなって、ディスカッションとか好きだと思うんですよね。僕がはいってる ISA っていうサークルでは、留学生が来たらみんなテンション上がって、喜んでディスカッションとかするんですけど、GC も僕のサークルと似た雰囲気があるので。自習室にはいつでも絶対誰かいますし。」

金－「いいですね、すごく楽しそう！」

(6) GC 3コース

「他のコースの学生はどんな授業を受けているのか。」

廣－「日本語コースはどんな勉強をしてるんですか？」

金－「一回生の時はとにかく日本語の上達は何よりの目標で、それに向かって頑張っていたのですが、二回生になると、レポートを提出したり、レジュメを制作したりするようになります。レポート提出の際も先生が一人ひとりの原稿を添削して下さいます。また、ひとクラスが 6 人くらいだったりするので、そのメンバーでディスカッションをする時もあります。」

永－「すごく充実してますね。」

奥－「授業は全て日本語で行われるんですか？」

金－「はい。全部日本語です。」

木－「大変そうですね。」

金－「いえ（笑）。日本語は好きなので。二回生からは日本語以外の学習も入って来たのですが、選択必修のような授業は日本の学生と一緒に授業を受けるようになるために、今の授業が少し難しいです。例えば私のとっている経済の授業は留学生が 10 人、日本人の学生が 20 人なの

どうしても日本人のレベルに合わせざるを得ないんです。とても難しいですが、もっと頑張っ
て勉強しようと刺激にはなりますね。」

廣「中国語コースはどんな学習をしてるんですか？」

木「今はまだ一回生ということもありまして、基本的には中国語の勉強です。基礎演習の時間
では中国の歴史や文化に焦点を当てて、レジュメ作って発表、という感じですね。ディスカッ
ションとかはまだしてないです。」

永「英語はみんな6年間とか、長い日数やってましたけど日本語や中国語は違いますもんね。
その違いがカリキュラムの違いにも表れているのでしょうか。」

木「日本語コースの学生さんたちって結構何年も前から日本語を勉強されてきた方が多いとい
うふうによく聞くのですが、また初めから日本語の勉強をされるんですか？」

劉「上級者向けの日本語コミュニケーションからスタートします。国語の授業みたいなもので
しょうか。日本語で書かれている文章を読んだり、音声学、意味論、などを習ったりします。」

木「英語コースはどんな授業を受けているのですか？」

奥「週に2回、プレゼンテーションの授業があります。他のクラスでも、ディスカッションを
する機会が沢山あり、自分の意見を英語でいう事に不安を感じる事が少なくなりました。留
学先では、日本以上に授業での積極的な発言が求められるので、本当にどの授業も役に立っ
ていると感じます。」

廣「はい、実践的な授業ばかりですね。」

まとめ

今回この対談を通して改めてグローバル・コミュニケーション学部学生の意識の高さを感じました。どの質問に対しても真剣に考えてくれて、しっかりした自分の意見を伝えてくれました。特に、留学に対しての思いはやはりみんな強く、ずっと留学を夢みて、これまで努力してきたようです。日本語コースの学生はこれから4年間、英語コースは春から、中国語コースは夏から、それぞれの思いを持って留学に挑みます。帰国後にまたこのメンバーで対談を行いたいです。ご協力ありがとうございました。

日本語コース授業体験

～授業の内容～

【最優秀賞俳句紹介】

きみを待つ ココアに溶けいる 白い雪

○日本語のアクセントの特徴

1. アクセント核のところでは音の高さ（ピッチ）が下がる。
2. アクセント核の有無や位置は、単語ごとに決まっている。
3. 1つの単語にアクセント核は、2つ以上ない。
4. 一度下がれば、上がらない。

例) け*いざいが【高低低低低】（経済）アクセント核が1拍目
おとこ*が【低高高低】（男）※1拍目にアクセント核がなくて、
低く生まれれば2拍目は必ず高いピッチ
さかなが【低高高高】（魚）アクセント核がないとずっと高いまま

○アクセント型（パターン）

- I. 起伏型…アクセント核があるタイプ
 - ・頭高型 1拍目の直後に下がる 例) お*んせい（音声）
 - ・尾高型 語末に下がる 例) なつ*（夏）
 - ・中高型 上記以外 例) きょうか*しょ（教科書）
- II. 平板型…アクセント核がないタイプ 例) きょうしつ（教室）



～感想～

日本語コースの授業を受けて

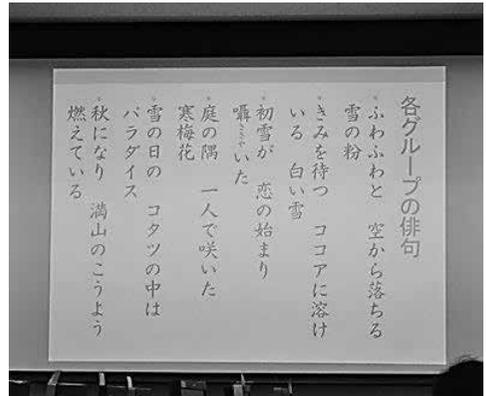
GC学部	英語コース	奥雲	茜
GC学部	英語コース	山田	春菜
GC学部	中国語コース	西河	貴康

貴重な体験

私たちは日本で生まれ、19年間日本で暮らしてきました。小学校から高校まで、日本語を国語の授業として学ぶことはあったけれど、日本語を外国語として学ぶという経験はもちろん今まで一度もなかったし、まさか自分たちが、日本語を外国語として学ぶ外国人の方々と一緒に日本語の授業を受けることになるなんて想像してみたこともありませんでした。さらに、日本語がこんなにも難しい言語だなんて、授業は驚きの連続でした。

俳句と日本語の音声の関わり

私たちが今回体験させて頂いたのは、日本語の発音、アクセントについての授業でした。授業はまず、事前に学生達が班ごとに詠み、そして投票した俳句の発表から始まりました。学生たちが選んだ最優秀賞と須藤先生からの審査員特別賞があり、どちらも発表された瞬間、クラスがわきました。みんな、自分たちの作った俳句に自信を持っていて、賞を取った班は本当に嬉しそうでした。俳句は五・七・五という韻を踏んでいて、日本語の音声や音韻に関わるため、大切だから覚えておくように、と須藤先生はおっしゃっていました。私たちも幼稚園の頃から何度か五・七・五の俳句を作る機会がありましたが、俳句を作るのは本当に難しかったことを覚えています。そこには何かメッセージがなければならず、でもそのメッセージをそのまま言葉にしてはおもしろくない。さらに、そのメッセージを五・七・五の音韻に合わせて相手に伝える、それが俳句の面白さであり難しさであると思います。日本語コースで学ぶ外国人のみんなは、そのことを理解しているように感じ、彼らが作った俳句はとても素晴らしい作品でした。



日本語で専門的な知識を習得する

授業は続いて日本語のアクセントについて更に具体的に、academicな内容に入っていききました。アクセント核、頭高型、尾高型、中高型…など私たちの聞いたことのない日本語におけるアクセントの専門用語が沢山出てきて、日本語を外国語として学ぶことはこんなにも難しいのかと、とても驚きました。さらに、日本語コースの学生は日本語の標準語を学んでいるため、ずっと関西弁で生活してきた私たちにとってはより難しく感じました。この日本語コースの授業に参加する直前までは、まさかこんなに日本語の授業が難しいと思っておらず、高校生の際に、長く海外に住んでいた友人から「日本に住んでいる人の英語の勉強の仕方は難しく、私は英語を喋れるけれどあなた達の英語の授業は分からない。」と言われた事を思い出し、少し理解できたように感じました。

標準語のアクセントと関西弁のアクセント

“雨です。鉛です。”私たちが普段一般的によく使う言葉です。“あめです。あめです。”私たちは普段あまり意識することなく発音を変えて区別しています。しかし、日本語を勉強している外国人にとって、これを聞き分けるのは困難であるように思います。この授業では、そういった発音の仕方などを学んでいました。日本語は地方によって方言があり、しかもその方言も地域によっては同じ日本人でも理解することが難しい時もあります。授業の中では、京阪アクセント（関西弁のアクセント）にも少し触れましたが、須藤先生は、まずは、標準語のアクセントを身につけることが大切だ、とおっしゃっていました。実際、日本で働くときに使うアクセントは標準語のアクセントであるし、関西弁で友達とおしゃべりしながら京阪アクセントを覚えるときも、標準語と共通している部分がけっこうあるからだそうです。

最後に

今回の授業は、私たちが普段、英語や中国語のスキルを高めるために受けている授業とは全く違うもので、学生たちにとって母国語ではない日本語を用い、日本語の構造などを専門的に学ぶ姿に、強い憧れと尊敬の念を抱きました。また、英語コースの学生は来年から留学に行きますが、留学先を選ぶ際に、やはり方言のことを気にして留学先決定に影響をもたらした人も少なからずいます。日本語で会話すること自体が難しいにもかかわらず、自国で学んできた標準語の日本語だけではなく関西弁も話す京都の大学を選んでやってくるということは、関西弁も学ぼうという挑戦であり、素晴らしいと感じました。

～日本語コースの皆さんへの質問～

授業後に、何人かの日本語コースの皆さんにいくつかの質問をしました。日本語の発音で難しいところは、やはりアクセントであり、また濁音や“つ”が難しいと感じる学生もいるようです。また、授業では日本語の規則を細かく学べるため、あとから自分で応用をきかせることもでき、今回私たちが体験させて頂いた“日本語の発音”の授業は、実際日本語で会話をするために努力している日本語コースのみなさんにとってとても大切で、かつ楽しいものであると感じました。そして、私たちが一番興味をもった、“日本語を学ぶにあたって、関西弁を使う京都に来たのはなぜか”という質問に対しては、日本の地域の中で、もっとも伝統的で古き良き地域に暮らすということに魅力を感じたからである、と考える学生が多いようです。



留学生によるエッセイ・コラム

日本へ留学して1、2年間が経った現在、
日本に対する印象や自身の変化について日本語コースの5人の留学生が語ってくれる。

異郷に身を置いている間、カルチャーショックを受けたり、
ホームシックにかかったりすることは日常茶飯事であるが、
努力すればその分は必ず実を結ぶ。

不撓不屈の留学生たちは一体どんな経験をしているのか、
どんな生活を暮らしているのか、どんな勉強をしているのか、
彼らの心の声に耳を傾けてみよう！



吴 赛

ウ・サイ

日本語コース 1年
中国出身



高校を卒業してから私は留学生生活を始めました。一人で外国で暮らすのは初めてなので、期待でいっぱいでした。でも同時に、私はこれからの生活に慣れることができるか不安で、すこし緊張していました。日本に来る前に、日本への一番強いイメージは環境がよくて街がきれいな国であるということでした。また、日本人は礼儀正しいという印象もありました。実は、日本で暮らし始めてから、そのほかにも、中国にいるだけでは知ることができなかつたさまざまな興味深い日本の特徴を発見しました。

まずは、環境を守ることです。日本人の環境保護への意識の高さは、日本に来てから気づきました。日本人はゴミ分別を工夫しています。燃えるゴミ、ビンやカンなどの種類に、細かく分けてゴミを処理しています。種類によって捨てる曜日や時間帯も異なります。最初は面倒くさいと思いましたが、「郷に入っては郷に従え」と思って、今ではだいが慣れることができました。

資源の少ない国である日本は、社会全体で協力して取り組んでリサイクル運動をしています。資源やエネルギーを節約するためには、ものを大切に使うようにするとともに、一度使ったものを何度も使うこと、そして使いまわすことが大事だとよく感じました。国民みんな一人一人自分の役割を果たすことが重要です。また、日本人はシャープペンシルをよく使っていることにも気がつきました。私の母国では、高校から鉛筆が使われなくなり、代わりにペンなどがよく使われています。試験の時も、鉛筆を使うと不合格と認められてしまう場合もあります。日本では大学生でもシャープペンシルを使うのでびっくりしました。なぜ日本人は鉛筆をよく使うかという疑問を持ってちょっと日本人の友達に聞きました。それは、たとえ間違いをしたとしても、消すことができるので紙を捨てずに節約できるからだと答えてくれました。やはり資源を無駄にしないための一つの方法なのだと思います。このように、些細なところから、日本人の環境保護への意識がうかがえます。

また、もう一つ興味のあることは日本人がよく謝ることです。謝るということは自分のミスを認め、それを相手に示すことであるということであり、どの国の人でも理解できます。しかし、日本では、謝るべきではないことでも、よく「すみません」と言っているのは不思議なことだと思います。例えば、他人の助けを受ける時、中国人はよく「ありがとう」と言って、感謝の気持ちを表しています。しかし、日本では、電車ではおばあさんに席を譲ったり、他人に道を譲ったりする時、「ありがとう」ではなく、「すみません」と言っているのをよく聞きます。日本人の考えでは、自分が助けを受けたことで、他人に迷惑をかけたと思っているそうです。それは独特な考え方だと思います。

さらに、日本の障がい者は健常者のように行動していることにも驚きました。自分は身体が不

自由でも、健常者より弱くないことを証明していると思います。それは完備されている施設やサービスと深く関係があると思います。エレベーター、廊下、お手洗い、電車など、どこでも障がい者のために設置した施設を見つけることができます。この思いやりのある福祉が充実している日本では、自尊心の強い障がい者の顔には悲しい表情はなく、笑顔が浮かんでいると思いました。

そのほか、店の人はいつも笑顔でお客に接することもよく感じたことです。明るい笑顔は陽ざしのように、人の心をあたためます。買い物をしてもらえるように、店員さんはとても熱心にサービスしています。いつ、どんな言葉遣いをするかは、全部ルールに従っています。日本人の慎重な性格がよく表されていると思います。もう一つその性格を表現できるのは日本人が著作権を尊重するということです。私の母国では、ネットで資料を調べたり、使用したりするのは普通です。でも日本では、レポートや論文を書くとき、無断引用すると、法律に違反するまでに至るかもしれません。この点は何度も強調されていて、厳しいと思います。

これらが、この1年半で日本に対してもっとも深く感じたことです。これからの大学生活で、新たに今まで発見していなかったことがわかるかもしれません。自分が日本に留学に来て、視野が広がるということはとてもいい経験だと思います。

박 현선

パク・ヒョンソン

日本語コース 1年
韓国出身



日本に留学生として暮らし始めてもう9ヶ月になる。他の国にくらべて韓国と地理的に近く、文化や生活様式など似ている点が多いということで、日本での留学生生活を不安に思ったりはしなかった。それでも「あ、ここは外国なんだ」と思わせる日本ならではの特徴をいくつか見つけた。なんでも最先端を走っているようなイメージだったけど、アナログな面も保っている日本という国での生活は大変面白い経験である。そんな経験をさせてくれた面白いことをいくつか紹介したいと思う。

まず自転車をよく利用する点が面白い。韓国のどの学校を探してみても、制服を着て自転車で登校する学生を見つけるのは難しい。全くいないというわけではないが、日本と比べて、かなり少ないだろう。制服も、スカートの下にジャージを着たり、かばんに大きい人形をつけたりと、結構個性を出して自由に着ているように見える。3人女子高生があるいていればそれぞれ少しずつ違う3つのスタイルの制服が見られるということが印象深かった。逆に小学生たちはみんな同じ姿をしている。みんなが同じ帽子をかぶって、各自の水筒の水を飲んで電車に乗るのが可愛いと思った。電車で小学生たちに会って、この子供たちも学年が上がったら私が興味深く感じた日本の女子高生のように、制服を着て自分の個性を出すようになるのだろうかかと想像してみたくなった。

日本といえば、個人主義が強くて人とのかかわりを好まないと思っていた。それは他人に迷惑をかけないため、周りの視線を意識しすぎる傾向があると思っていたのだが、意外に日本人は団体行動が好きで「みんなで協力して」作業をすることが多いということに気づいた。気軽に友達を呼んで家でご飯を食べたり、パーティーを開いたりするので、すでに知っていた日本人とは異なって大変興味深く感じた。日本の人々は外国人にも親切で、趣味で外国語を勉強している人にもよく会う。同志社で出会ったアメリカ人留学生も日本は外国人が暮らすには最高の国だとも話していた。でも、日本人は大して洋画をみたり洋書を読んだりはしないように感じた。日本で残念に思うことを話す機会があれば、私は是非「洋画が上映される時期が他国に比べて非常に遅いこと」だと答えたい。一番残念だったことは大変楽しみにしていた『The Avengers (アベンジャーズ)』の上映が韓国よりも遅かったことだ。韓国では4月に上映開始したにもかかわらず、日本では8月になって、やっと見られるようになったからである。

留学に来る前、学校が京都にあるから方言を使う人が多いだろう、とある程度、標準語ではない日本語に対する覚悟をしてきた。事前に私が知っていたのは京都弁と大阪弁くらいで、日本にはそれ以外にも方言がたくさんあることを知った。留学生たちの意見も含めて、関西弁を話す人は愛嬌があるように聞こえてカワイイと思う。ところで、日本のテレビを見ていると関西弁を話すお笑い芸人がよく出てくる。これはさすがにカルチャーショックだった。なぜなら韓国では方言を直さないで話す芸能人が最近増えてきたとは感じるが、それでも数は少なく、あまり目立たないのでテレビ放送は標準語でされるイメージが強いからである。地方放送でもないのに、芸能人たちが出身の方言を標準語に直さないのが面白いと思った。韓国の標準語と同じく、日本の標準語もやさしくて改まった感じがする。日本のお笑い芸人たちは関西弁がもつ特別な魅力を十分に発散している。それで日本はまるで虹のように、いろいろな色を持った人たちが集まって仲良くしているように感じた。

直接ぶつかりながら文化の違いを感じて様々な経験をするのは留学ライフを面白くする。しかし、違いに適応できなくて腹が立つことがおこるかもしれない。20年以上違う国で生きてきたので日本の文化が理解できないことがあるのは当然である。よって全般的な日本と言う国についての背景知識をつんでおくこともよいと思う。知らないでパニックに陥るよりは、異質的な文化への心の準備ができていれば、困ったときに少し慰めになるかもしれないからである。私は日本について勉強しながら、よく日本の「本音」と「建前」について考えさせられた。留学生だけではなく、日本人たち自身も「日本と日本人」といえば思い出す普遍的なイメージがあると思う。そんな日本と日本人の特徴と性質、またそれらが容認されるしかなかった理由を鋭く分析して説明した本がある。私の日本固有の社会文化と性質の理解に役に立ったその本を留学生のみんなにも是非読んでもらいたい。

『菊と刀』という本は世界的にも有名で認められていて、20世紀の前半にアメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトによって書かれたものだ。実はこの本は戦後の日本に対処するために日本への文化的な理解が必要と考えたアメリカ政府の要請で作成された一種の日本文化分析報告書である。彼女がこの本で目的としたのは、平均的な日本人の行動と思考のパターンを探求することであったという。『菊と刀』は日本人の外面的な行動の描写と、行動の背後にある日本人の基本的な思考方式の分析から始まる。そして日本文化で重要な体系を立てている義理、義務、人情、恥などといった概念を体系的に分析している。しかし、個人的には少し偏りがみられるところもあると感じた。現地調査をしないで各種の文献や日本人とのインタビューなどを通して本を完成させた点から、日本理解に完璧に役立つとはいえない。それでも、この本を通して留学生たちにはすでに知っていた日本を新たに見つめなおすよいきっかけになると思う。また本の中で、アメリカ人で代表される、西欧人による新しい観点で日本について考えてみるのもいいと思うのである。

以上、日本について気づいたことを、つれづれに書いたが、なによりも魅力的だったことは、日本は日本ならではの色がかっきりしているということであった。個性があって、開放的である一方で日本固有の面も失わない姿を見て、日本は「旧」と「新」がいいバランスを保っていると感じた。毎日新しい経験をさせてくれる日本をこれからも楽しんでいきたい。

周 林京

シュウ・リンキョウ

日本語コース 1年
中国出身



中国は近年、急激に発展しているが問題も多い。隣国である日本は、人口はわずか1.3億、自然資源は豊富ではないが、先進的な科学技術を持ち、国民の生活水準も高く、世界の経済大国だと言われている。つまり中国は日本から学べるものが何かあるはずだ。中国人の私は日本に留学後、日本について以前知らなかったことや誤解していたこと、そして驚いたことが何度もある。ここでは今まで得た経験や知識をまとめ、日中の国民性の違いを明らかにし、日本人の長所は積極的に学びたいと考える。

1. 裕福＝幸福？

中国人から見ると日本人の生活水準は大変高く、日本人の友人によると「日本には乞食がない」という。つまり現在の中国で一番問題になっている格差問題が、日本にほとんど存在してないことを知って驚いた。しかし、水準が高いため、平均に達しないとストレスがたまって、自殺することも多いらしい。また物価は中国の何倍もする。日本では物価に応じたそれなりの給料をもらわないと生活が困難になる。逆に、中国は物価が安く、多くの庶民は海外旅行やブランド品、グルメなどの贅沢なものに対しては最初から無縁で、自分とは関係のないものと判断している。中国人は物欲が少ないからストレスも少なく、ある意味で幸せだ。つまり物質的な裕福は人生の幸福とは必ずしも一緒ではない。

2. 謝罪文化

日本人はよく謝る傾向がある。何かミスしたら、とにかく相手に謝る。日本の友達にそのことを言うと、逆に中国人はあまり謝らないと言われた。確かに中国人はあまり謝罪の言葉を口にしない。しかしそれは、言葉の重さを大切にしているからである。口で謝って何も解決できないより、中国人はもっと相手に確実なことをやったほうがいいと思っている。日本人は確かに一見礼儀正しいが、心の底から本当に反省しているのか疑問だ。料亭で、近くに座っているお客さんのお皿に髪の毛が入っていた。すると、すぐに接客長、料理長、店長が次々と謝罪にやってきた。しかし会計は別問題という考え、料金は一円も安くしてくれなかったという。これは中国で絶対ありえないことである。日本人は、相手が自分を責める前に、まず自分から先に謝罪したら、相手は必ず許してくれると思っているのだろうか。また謝罪後、もし相手がまだ怒っているなら、それは相手の度量が狭くて、寛容でないと考えているのだろうか。私はこの日本人の傾向は、他人の好意に甘えるずる賢い性格で、学ぶべきではないと思う。

3. 曖昧文化

日本人は物事ははっきり言わない、断言しないとよく言われるが、日本人はこれが他人に対してよく気を配る、配慮するという美点だと信じている。確かに曖昧なやり方でいいこともあるけど、はっきり言わないと、相手に誤解を与えることもある。中国では「曖昧」という言葉はマイナスイメージである。「YES」・「NO」をはっきり言わずに、曖昧に返事をしたら、失礼だと思われる。もしかして、曖昧な扱いで、最大な利益を求めているのではないかと思われるかもしれない。現在、日本は自殺大国であり、さらに近年無差別殺人事件が頻繁に起こっている。その原因の一つとして、物事を曖昧にして自分の意見を言わず、常に鬱屈した状態にいる日本人の性格があげられるのではないか。もっと自己表現したほうが、自身のストレスも少なくなり、さらには相手を誤解させないための配慮とも言えるのである。

4. 親しき仲にも礼儀あり

「親しき仲にも礼儀あり」という言葉が好きである。日本は世界一のマナーを守る国だとよく言われる。エスカレーターを利用する際には必ず急いでいる人が通るため片側を空ける。さらに日本では、いくら親密な関係になっても、相手に対する遠慮は欠かさない。相手に何か頼むときは、必ず最初に「やってもらえる」と相手の都合を聞き、やってもらった後もきちんと感謝する。中国では、やってくれるのは当たり前のこと、やってくれないのは失礼となる。確かに親密さに甘えて節度を失うのはその後の不和のもとになりやすい。だから、いつでも相手のことに配慮し、ある程度の距離を守るという日本人の考え方に、私は好感を覚える。

5. 団体主義

日本は非常に団結している民族だと言われる。またその背景として競争意識は非常に低い。友人の話では、日本人の考えとして、自分は才能がないなら無理する必要もないし、この社会には様々な役割が必要で、皆がエリートになれるわけではないから、自分なりに生きればよいという。一昨年の大震災でも、震災地には日本全国から救援物資が届き、国民の心が一つになって困難を乗り越えた。一方の中国では、社会格差が激しく、子供の時から誰にも負けたくないという競争意識が強くあり、その結果あまり団結しない傾向がある。しかし結果は日本は中国を超越して世界的な経済大国になったではないか。これは日本人の団結主義が大きく影響しているのであろう。この点は中国人も学ぶべきである。

昔から中国と日本は極めて近い距離にあって往来に便利である。日本と中国は様々な点で違いがある。元々どちらが良くてどちらが悪いということはないと思うが、急速にグローバル化が進み、現在では、隣国の長所を学び、自国の短所をなくすことが非常に重要だと思う。私は中国人としての長所は守りつつ、日本人の長所も積極的に学んでいくつもりである。

倪 晓刚

ニ・ギョウゴウ

日本語コース 2年
中国出身



日本に来てあっという間に4年が経った。この4年を振り返ってみると、日本語でのコミュニケーションの苦痛、大学合格の嬉しさ、大学生活の楽しさなど様々なことが思い浮かんできた。いつの間にか、自分が料理できるようになるなど、母国では何でも親にしてもらった私にとって、留学は自分が成長できるいい機会だったと思う。日本での留学経験で変化したことの中で、最も印象に残った4つのことを挙げて述べたいと思う。

第一に、時間に対する自分の考え方の変化である。日本では時間を守るというのは当然のことであって、日本人はそういう感覚が身に着いている。それで、その感覚を肌で感じ、受け入れるべきであると判断し、経験を重ねて、時間に厳しくなった。また、メールの返事にしても、早めに返事するようになることも日本で生活するうえで必要な習慣だと思う。特に、仕事をする上で、メールの返信などはその人の評価と直結される為、時間というのは単なる時間ではなく、それ以上の価値を秘めているといっても過言ではないだろう。身の回りの細かいことで見逃しやすいと思うが、大切なことである。

第二に、自立した考えを持つ上で、自主的に問題に取り込み、解決する能力を養う大学の授業は自分にいい変化をもたらした。ある問題に対し、決められた答えを見出すだけではなく、その答えに到達するまでの過程や、ほかの答えを考え出すなどの行為によって、フォーカスを答えではない問題に置くことで新たな可能性に気づき、創造的、革新的に物事を考えるようになった。思考の幅が広がったのである。さらに、日本に来てから様々な国からの留学生と接し、共に勉強していく間に、様々な「初めて」の考え方や物事のやり方と触れることができた。そのような新たなものが正しいかどうかは重要ではなく、様々な角度から物事を考えることや様々な立場に立てるように考えることが大切だと思う。実際に、日本語学校でも、大学でも、色んな国の人に出会って来た。そういう状況でコミュニケーションをする際に、文化の違いを痛感するのは当然なことであろう。そのような生活を営為する中で、お互いを配慮、理解し、異文化に対する抵抗感を無くす。結果、人とのコミュニケーションの発展にも繋がり、もっと相手を分かり合えるようになるだろう。

日本に来てから、自分で解決するしかないことが多数あった。銀行の口座の開設やインターネットの加入や保険の申請などの手続はもちろん、日本語でレポートを書くことや日本語で大学の面接に至るまで、数多くの困難があった。勿論、周りに手伝ってもらったこともあったが、自分で解決しなければならないことが多かった。更に、壁に出会ったとき、悪戦苦闘しながらも逃げずに、現実に向き合い自分の力で解決するため努力する。そうする間に、自分自身が強くなったことを確認することができた。

また、選択の強いられる場合も多数あった。例えば、複数の大学に合格したとき、どの大学を選ぶべきか。確かに、先生や友人からアドバイスはあるかもしれないが、最終的に自分の選択を左右するのは自分の頑なな思いである。そういう、頑なさがないと留学生活は厳しいと私は思っている。以前、何でも親が決めてくれた私にとって、自分で何かを考えて選択するのは初めての経験であった。就職する際も同様、周りのアドバイスが必要であるが、どのような仕事がしたいか、何を目指しているか自分の考えで決める。自分で選んだ道を歩むということは、将来どのような結果が待っていても、それをきちんと受け止められるということである。結果だけが全てではない。自分で決めるということは、後悔のないように自分が正しいと思う道を歩むことである。将来、様々な難関や障害があると思う。だが、毎回助けてもらうのではなく、自分の力での確かな判断ができる人間になりたいと思う。

第三に、自分の将来の計画についてももっと具体的に考えるようになった。中国では親が自分の進路について決めておく場合が多いため、親に従い、自分の意思とは関係のない人生を生きていく人が多いと言われている。だが、日本に来てから日本人だけではなく、様々な国の人との交流を通じて、自分の人生についてもっと工夫するようになった。例えば、卒業してから中国に帰るべきであるか、大学院に入るべきか、日本で就職するかなど自発的に将来を考えるようになった。世間に対する視野が広がると同時に、考え方も変化している。

最後に、留学は、様々な活動をするきっかけになった。例えば、学校で幹事として活動することや、スタッフとして様々なイベントに参加するなど、中国で体験したことの無いことにチャレンジしてきた。単に、学校の国際交流のイベントだけではなく、領事館や日本の民間の日中友好のイベントもあった。結果、さまざまな領域の日本人とコミュニケーションを取る機会になり、学生に限らず、普遍的な日本人の考え方を理解するようになった。中でも、領事館のイベントは、領事や日本の市長など役人と接する貴重な経験であった。様々なイベントに参加することにより、視野が広がった上に、自分自身も成長したと思う。今後も、体験したことのないことへの恐怖心は忘れ、積極的に前に進みたいと思う。チャレンジには、失敗は伴うが、失敗を恐れずに、過程を重視するべきである。その失敗も自分に勉強になると思う。

もちろん、留学するということには、良いことばかりではなく、裏面に隠されたデメリットもある。親と離れ半強制的に一人暮らしになるため、孤独感を抱くときや、一人で病気になったときには大変な思いをした。実際に自分も経験がだんだん増えてくると同時に、親への感謝の気持ちもだんだん高まってきた。それは、留学の良い点だと思う。

留学によって日本の社会と接するため、様々な問題が出てくる。ただ日本語の勉強だけではなく、どのように問題を解決すれば良いのか。その問題が解決できる力を育てるのが大事である。今までの経験が将来への貴重な財産になると思う。これからも日本にいる限り、日々を大切に楽しんで過ごしていきたい。

留学生に読んでもらいたい日本理解につながる書籍紹介

劉 瀟瀟

リュウ・ショウショウ

日本語コース 2年
中国出身



日本語を通して日本を知ろう！

彭飛シリーズ

大学一回生の頃日本語を通して日本文化を読むという点に興味を惹かれ、彭飛シリーズを読み始めた。著者は日本語の特徴や方言、日本語と中国語の違い、日中文化の比較など日本理解につながる様々なテーマについて語ってくれる。非常にやさしい日本語で書かれており、日本理解の入門書として手軽に読めるシリーズである。

著者プロフィール

1958年中国上海生まれ。復旦大学外国語学部卒業。1984年来日。1993年大阪市立大学文学部で博士（文学）号を取得。日本語学術振興会外国人特別研究員、国際日本文化研究センター客員教授を経て、1996年から京都外国語大学助教授。2003年4月から京都外国語大学教授。（『外国人を悩ませる日本語からみた日本語の特徴』より）

主な著書：『日本語の配慮表現に関する研究』和泉書院、『大阪ことばと外国人』中公文庫、『「ちょっと」はちょっとポンフェイス博士の日本語の不思議』講談社、『知れば知るほど「はてな？」ニッポン』祥伝社

彭飛（2006）『日本人と中国人とのコミュニケーション』和泉書院

日本文化を理解しようとしたところ、学部の教授に彭飛の書籍を勧められた。来日したばかりの方々も日本語と母語の言葉遣いの違いとずれによってカルチャーショックを受けたことがあるだろうと思う。なぜ語尾に「…のではないかと思うけれども」のような回りくどい言い方じゃないとだめなの？なぜ「また考える」は断る意味になるの？「ちょっと」は一体何をぼかしているのか？と戸惑うかもしれない。私のような違う文化背景を持つ人々にとってはこのようなところは理解しづらいであろう。

そこで、日本に20年以上住んでいる著者は中国人の視点から着手し、日本語の特徴に言及しながら、日本語と中国語という二つの言語の違いによって生じた誤解と摩擦の原因分析とメカニズムを掘り下げる。著者は言語が一国文化の重要な一部として、様々な文化側面を反映していることを前提とし、読者が日本文化をより深く理解していくという目的を設定している。本の中には身近な事例を多く取り上げており、異文化コミュニケーションや異文化共生の理解にとっては貴重な一冊である。

中国人の日本語学習者だけではなく、日本語理解は日本文化理解を阻んでいるという悩みを抱えているの方々にお勧めする。

彭飛（2003）『外国人を悩ませる日本語からみた日本語の特徴—漢字と外来語編』凡人社

「日本語・特徴」というキーワードで検索すると、彭飛シリーズのもう一冊と出会った。外国人日本語学習者を悩ませる漢字と外来語を中心に、日本語をより容易に習得できるための情報が満載である。「日本語の漢字と中国の漢字はよく似ていて、区別できない、間違いやすい」「外来語と和語の違いはよく分からない、使い分けられない」という方にお勧め。単なる漢字と外来語の事例を取り上げるだけでなく、筆者は実際に日本人に取ったアンケートの結果まで載せ、より説得力のある結論を出しているという。

少しのぞいてみよう！

(20) 「スプーン」と「匙」(p.132)

基本的な意味

食事をする場合、さじで食べるとはあまり言わない。

「スプーン」の使用頻度は相当高い。「スプーン」は食べ物をすくう場合に多く用いるのに対して「さじ」は砂糖などの粉末状なものをすくう場合の道具の名として多く用いられる。

検討事項

料理づくり指導の本を読むと、「計量スプーン」と言いながら、分量を示す場合には、「小さじ」「大さじ」という表現を使っている。現在の日常生活において、コーヒーに砂糖を入れる場合は「さじ」よりも「スプーン」のほうをよく使う。

日本語は日本文化の重要な構成要素であり、日本文化のキャリアーとしても見なされている。和語、漢語、外来語と構成されている日本語は変化したり、発展したりすること自体が日本の民族文化の伝承と発展を反映しているとは言え、日本語を洞察することで、日本人と日本文化の百面相を見ることもできる。我々日本語学習者にせよ、日本文化を理解しようとしている多くの読者にせよ、ぜひ読んでもらいたい。

もっと知りたい ▶ ポンフェイのホームページ <http://homepage2.nifty.com/ponfei/>

日中問題の視点から日本理解へ

金谷譲・林思雲 (2005) 『中国人と日本人 ホンネの対話』日中出版

金谷譲・林思雲 (2005) 『続 中国人と日本人 ホンネの対話』日中出版

日本のテレビで中国のニュースは常に流されている。中国のことを全く知らない方は、ふるい分けずに、丸ごと情報を飲み込んでしまうことが多いだろう。中国でも政府側の考え方に洗脳されて、物事についての客観的な判断が足りず、盲目的な行為まで至ることは決して少なくない。

この現状が現在日中関係がなかなかうまく行かない原因の一つだと私は考える。日中両国がこれからも一衣帯水の関係が続いていくからには、両国間の問題に目を背けてはいけないと思う方は多くいらっしゃるであろう。日本思想の内的構造を掘り下げてくれるこの一冊、「日中間で現在まで起こった摩擦や矛盾などの問題の根本的な原因を知りたい」という方にお勧めしたいと思う。

本書は中国人と日本人の物事の捉え方の違いに焦点を当てた、日本に留学して工学博士号を取得した在日中国語メディア関係会社に勤めている中国人・林思雲と、大学で中国史を学び、現在中国語を翻訳したり、インターネット上で中国・日本関連の文書を発表したりしている日本人・金谷譲の二人の対談を中心とした形である。

第1部「なぜ反日デモは起きたのか」(中国人の生活事情や国民性を中心に)、第2部「それでも中国人は日本にやってくる」(国民の目を通して中国の事情を語る)、第3部「どうやって中国とつきあうか」(日中関係の展望)という3つの部分で構成されている。筆者たちはステレオタイプと言われる一般論を避け、身近な事例と自分自身の経験に基づき、より専門的な文化論の視点で日中問題を分析する。

続編では、前編の立場を踏まえ、日中両国文化と価値観の違いを中心とし、近年中国の状況(第一部)、戦後日中関係が悪化する原因(第二部)、時事問題取材しながら日中問題の最近の状況を紹介する(第三部)と分かれており、日中文化意識と相互認識などより生じたギャップなど根底的な原因に言及しながら、さらに今後日中問題を解決する提案まで述べている。

日本と中国の過去を回顧しながら、未来を展望するという流れで書かれている2冊である。もちろん、本書はあくまで一般論ではなく、筆者たちの個人の経験に基づいた私的な見方をもとに展開されている。しかしこの本は我々読者にとって、価値判断が含まれないように問題を考える習慣を育成するには非常に有意義である。

日本の歴史、政治と外交に関心を抱き、日中問題を通して日本を理解したいという読者に強くお勧めする。

お勧めの一冊 比較文化論を通して日本を見る

▶ 金文学 (2003) 『日本人・中国人・韓国人』白帝社

みなさん、初めまして！

今回私たち GC 2期生は、アメリカ、カナダ、イギリス、ニュージーランド、オーストラリアに留学中の 1 期生の先輩方に留学について 7つのアンケートを取らせて頂きました。すると、とても興味深いお話や留学に関する貴重なアドバイスが聞けました。以下、質問とその回答です。自分の留学生活に思いを巡らせてみてくださいね。

1. 日本と留学先大学の授業の違い
Please tell me about the differences (good and/or bad) between the classes in Japan and the country where you live in now.
2. 留学先の国ではいけないこと
What are some taboo topics or behaviors in that country?
3. 一番印象的な文化経験
What has been your most impressive cultural experience there?
4. 留学中、英語能力以外に得た力
Besides English, what are some other skills or abilities you have gained while studying abroad?
5. 帰国後、在学中にしたいこと、卒業後したいこと
What do you want to do after studying abroad during the rest of your time at Doshisha? And what do you want to accomplish after graduating from university?
6. その国でおすすめの食べ物と場所
Can you recommend some food and/or places in the country you are in?
7. 外国人に喜ばれる日本のおみやげ
Can you tell me a good Japanese souvenir to take to the people in that country?

1. Please tell me about the differences (good and/or bad) between the classes in Japan and the country where you live in now.

- I think the notable difference of classes in university between Japan and New Zealand is the discussion class called 'Tutorial.' Usually each class has only 10 to 15 people and we discuss various things about the subject. We had to read heaps of stuff as the preparation for that class. I guess it's going to be tough for most Japanese students. (Victoria University of Wellington)
- In Japan, students are required to do many assignments while students here have to study by themselves. To write a logical and well-argued essay is the most important skill in the class in the U.K. Teachers here encourage students to discuss more about the subject they are learning. Students usually have one lecture and one seminar class in a week. (University of Southampton)
- I've been in England and I took a couple of modules such as Anthropology and International Relations, which are very different from the ones I took in GC last year. I've been impressed and stimulated by the attitudes toward studying of the students here. Apparently unlike the majority of

university students in Japan, they have a clear vision and they enjoy studying their own subjects — always asking questions and solving unclear points with friends and tutors in the class, which was very helpful to other students as well. (University of Sussex)



(Southampton)

- The big difference is the students' motivation. Students in Acadia are studying what they really want to know. They are very curious about what the professor says. That's why the questions from students don't stop even in free time. (Acadia University)
- The classes of GC consisted of a small group of people. But the classes in the University of Winnipeg were larger than those in Japan. It was a good opportunity to know a lot of kinds of ideas from many students. (University of Winnipeg)
- I felt a big difference between the atmosphere of classes in Japan and Canada. In my opinion, in Japan all the things students have to do is to sit, to listen and to take notes during the class. That's it. On the other hand, in Canada, every single student needs to speak out their own opinions to all classmates. There are a lot of chances to share ideas with classmates, such as discussions and debates. I think this is the biggest difference between them. (Vancouver Island University)
- I had to study hard, not only in general classes but also in courses required by the department. Professors in America give us tons of reading, quizzes, and papers in every class, and then we cannot keep up with the class without completing them. Moreover, we are not regarded as attending unless we say something good in discussion class, so we have to prepare well for the class by doing homework before the class. (UC Davis)

2. What are some taboo topics or behaviors in that country?

- Apparently there might not be any taboo topics (though of course swear words are unacceptable). (Victoria University of Wellington)
- Skipping a queue, not saying 'sorry' or 'thank you' when you should say it, and saying curse words in a public. (University of Southampton)
 - ※skip a queue: 列をぬかす
 - curse words: 罵り言葉 (汚い・不快な表現)
- I don't know if it is taboo, but drinking alcohol outside is illegal in Canada. We aren't allowed to drink alcohol even in our own garden. I've seen police warning students who were drinking alcohol in their garden. (Acadia University)



(Southampton)

- I thought “religious” topics were very sensitive to all people because many people said “You should not talk about it!” before I went abroad. So I tried to avoid this topic even though I had questions. However, I learned it totally depended on the person. It was true that I felt some people did not like to talk or ask about it, but the others were willing to answer my questions about religious behavior or tradition. After building up a trustful relationship with someone, I can ask about this topic without hesitation. But I would say I need to be careful. (Vancouver Island University)
- Though it might not sound like answering the question, let's say don't be "Japanese." I seriously realized that Japanese care too much about what other people think so they wouldn't speak out what they want to say. (UC Davis)

3. What has been your most impressive cultural experience there?

- Because New Zealand used to be ruled by Maori in the ancient age, and there are still many Maori people and other Pacific Islanders such as Samoan, Fijian and so on, the culture of tattooing is really active here and it's socially acceptable. That's one of the most impressive experiences. (Victoria University of Wellington)
- British tend to say ‘excuse me’, ‘thank you’ and ‘sorry’ many times, even little kids. (University of Southampton)
- What I was shocked at the most is the weather in the U.K. Britain is famous for moody weather, but it is really more than I had expected. I always brought broly when I went outside when I was in UK. (University of Sussex)
※broly: 傘 (こうもり傘)
- People in Wolfville are hopelessly unpunctual. Even public transportation is often delayed. For example, the bus often appears 30 minutes late. (Acadia University)
- There is no ‘keigo’ in English, but English speakers choose the appropriate way of talking with people. For instance, students use polite English or tone down when they discuss with professors. Furthermore, they do not call their professors by their first name unless professors allow them to do so. (UC Davis)
- Realizing the difference between the reality and my stereotype. (UC Davis)

4. Besides English, what are some other skills or abilities you have gained while studying abroad?

- Traveling around Europe economically. Moreover, I could experience various different cultures through the travel. (University of Southampton)
- I've got not only the ability or skill, but also the moral sense to thank people and to be honest to myself. Also I've been more confident of myself than before, not to be afraid of making mistakes, and what is more, I've found it enjoyable to study. (University of Sussex)

- I became someone who can ask questions. I'm shy. When I was in Japan, I didn't often ask questions because I felt awkward. But students in Acadia don't hesitate to ask questions at all. Their attitude changed my mind. I noticed that asking questions is our job. Just listening in class isn't enough. (Acadia University)



(Sussex)

- Saying what I think was a very important thing to live in a different country. (University of Winnipeg)
- I learned the way to express my opinions because I often had to organize my ideas and share them in Canadian classes. Regardless of Japanese or English, I learned the importance of telling people my opinions and exchanging them. (Vancouver Island University)
- Since I had many Korean friends and originally was interested in Korean stuff, I somehow got to gain some Korean language skills. I'm pretty sure study abroad doesn't have to be just a place to study English. (UC Davis)

**5. What do you want to do after studying abroad during the rest of your time at Doshisha?
And what do you want to accomplish after graduating from university?**

- I will get the general knowledge about the economy, politics, and other subjects which are required as "common sense" in society. Hopefully I would like to work in a foreign country, especially in Southeast Asia as a journalist. (Victoria University of Wellington)
- I would like to study about management from different points of views. Hopefully, I can maintain or even improve my English skills enough to work abroad in the future. (University of Southampton)
- I have to improve my speaking skill. Truth be told, I'm still not good at speaking compared to my friends. And after graduating from Doshisha, I hope to work with foreign people. (Acadia University)
- I am thinking of trying to improve English Education in Japan. (UC Davis)



(Acadia)

6. Can you recommend some food and/or places in the country you are in?

- Foods [in New Zealand] are basically the same as British ones...fish and chips and pies...but most restaurants are quite nice in Wellington. As I noted in the article for the GC Facebook page, every single place in NZ is awesomely beautiful. I strongly recommend to the next GC's students to do skydiving. (Victoria University of Wellington)
- I recommend you to visit London, Oxford, Bath, which represent typical British tradition. (University of Southampton)
- People tend to say "English food is disgusting!" (I thought so as well!) But actually it is not! I like roast dinner on the weekend (lots of vegetable, meat, gravy sauce), and I do recommend English tea. I bet everyone will love them! (University of Sussex)
- Niagara Falls is a good place to visit. I had never seen that kind of magnificent view before. Also, you should visit Montreal and Quebec City. You are going to have an awesome time there for sure. (Acadia University)
- There are a lot of ethnic groups in Canada. So if you go to Canada, you can taste a lot of different kinds of foods from different countries. (University of Winnipeg)
- There are few traditional foods in Canada; however, I would recommend "poutine." (Vancouver Island University)
 - ※poutine: カナダ東部の料理。薄いクレープの上にフライドポテトを乗せ、その上にチーズを乗せ、グレービーソース（肉汁で作ったソース）をかけたもの。（ALC [英辞郎] から記載）
- You should eat pizza in America. It's extraordinarily huge and tasty. (UC Davis)



(Winnipeg)

7. Can you tell me a good Japanese souvenir to take to the people in that country?

- It depends on the preference of the homestay family. In my case, I heard that my host mother likes cooking so I brought a good Japanese kitchen knife. (Victoria University of Wellington)
- I brought tenugui, origami (with Japanese pattern), and some stuffs with traditional Japanese pattern. They fancy this sort of pattern and seem to be pleased. If there are any children, it would be great to do origami together! (University of Sussex)
- If you are going to live in residence, just snacks are fine. Actually, I gave some snacks to my roommate. I heard one of my friends gave her host family chopsticks. (Acadia University)

- 和紙シール、和柄のポストカード、筆ペン、日本製の文房具、キティーちゃん&リラックマグッズ、コマ、紙風船。(University of Winnipeg)
- I felt most Canadian people like to put up decorations at home. In my case, I brought some Japanese hair cream or hand cream. (Vancouver Island University)
- I highly recommend Japanese snacks, candies, and sweets. Everyone'll like them! (UC Davis)

楽しんで頂けましたでしょうか？これから留学を志していられる皆さんの役に立てれば幸いです！わからないことがあれば、いつでも質問受け付けます！不安も多いとは思いますが、充実した留学、大学生活にするために、お互い頑張りましょう！



(Davis)

TOEFLって何？

～教えて、先生!!～

GC学部 英語コース
Preparation for TOEFL担当

長谷部 陽一郎 先生



留学する為に受験が必須になっている TOEFL (一部の大学を除き)。しかし未知の試験に苦勞する学生は少なくないようです。「TOEICとTOEFLの違いは何?」、「どうやって勉強すればいいの?」等々、GC 学部入学後、多くの学生がそういった疑問を持ち、戸惑い、不安に感じてしまうかもしれません。TOEFL について知り、その上で自分なりの苦手を意識した戦略を練って高得点を狙うことは、自分の希望する SA 先の大学決定の為に必要不可欠。それでは、いったいどうすれば良いのでしょうか？

今回、「Preparation for TOEFL」を担当している長谷部陽一郎先生に生徒が抱きかちな疑問についてインタビューを行い、先生の考える「TOEFL とは何か?」、さらに本音を熱く語って頂きました！入学してすぐに経験することになり、少し不安を感じてしまう TOEFL、まずはイメージトレーニングから始めてみましょう！

Q1 大学入学前に TOEIC を受験したことがある人は多いですが、TOEFL 経験者は少ないと思います。先生の考える TOEIC と TOEFL との違いとは何ですか？

A 各試験が設定している目的の違いです。TOEIC はビジネスの現場で必要となる英語コミュニケーション力が問われます。一方、TOEFL は英語圏での学生生活で必要な力が問われます。また TOEFL の方は多くの大学で海外からの留学生に対する必須条件として課されていますね。

Q2 具体的な問題傾向の違いとは何ですか？

A TOEIC では企業内での会議や電話対応の場面などがリスニング問題として用いられる他、リーディングセクションでも商品売上の請求書やビジネスメールといった題材が用いられます。TOEFL のリスニングでは大学での講義やキャンパス内での友人同士の会話などが、リーディングでは社会科学や自然科学、その他、ありとあらゆる学問分野の内容が用いられていますね。要するにビジネス指向なのが TOEIC で、よりアカデミックなのが TOEFL です。

Q3 TOEFL の難しい点は何ですか？

A TOEFL には ITP/PBT と iBT という 2 種類があり、必要な対策は異なります。前者ではリスニング、文法、リーディングの力が問われます。後者ではこれらに加えてスピーキングとリーディングの力が問われます。iBT で文法に特化した問題は出ませんが、やはりそれが重要なのは言うまでもないですね。

Q4 ITP の試験を全員 2 回受験しますが点数が 1 回目と 2 回目で伸びる人と伸びない人がいると思います。先生からみてそういった学生達の間には何か違いは見られますか？

A 問題との相性もあるので、その時々で点数に差が出てくることは当然あり得ます。ただ、資格試験というのは形式が決まっているので、限られた時間でもしっかりと計画的に準備すればそれなりの結果を出せるものです。1 回目の試験後に自分の弱点を客観的に分析して、それを克服するための勉強を集中的にやれるかどうかでしょうね。

Q5 リスニング問題に苦戦する人が多いようです。対策はどのようにしたら良いでしょうか？

A 確かにリスニング対策は難しいです。「聞き流すだけ」といった教材も出ていますが、私は評価していません。耳からの情報に集中して「精聴」する時間をどれだけ作るかがむしろ大事だと思っています。案外これができていないのです。例えばスクリプトを読みながらいくら聞いても、脳は視覚情報を優先するので聴解の力はあまり伸びません。意外に思うかもしれませんが、スピーキングを伴った練習がリスニングに役立ちます。耳を頼りに口もしっかり動かして、毎日数十分がそれ以上シャドウイングとリピーティングをやりましょう。きっと良い効果があります。

Q6 先生の考える得点アップのコツ、良い勉強法などはありますか？

A 上でも言いましたが、1回目の試験から2回目まではわずか2ヶ月。その間にできることは限られています。自分の弱点を見つけて、1つ1つ潰していくことです。人間は楽をしたい生き物なので、案外これは難しいものです。しかしそれをやるかどうかは分かれ目でしょうね。

Q7 多くの方が試験対策として授業で使用するテキストの他に副教材として個人的にポキャプリーを増やすため、単語帳を購入する人が多いようです。何かおすすめの教材はありますか？

A TOEFL 対策用の単語集はそれほどたくさん発売されていません。なぜかという、TOEFL ではあらゆる学問分野の話題が出てくるので、1冊の単語集でカバーすることが事実上不可能だからです。リーディングやリスニングの勉強をするなかで出てきた単語や表現を確実に自分のものにしていくのが一番効率的だろうと思います。ただ、もちろん、絶対に知っておくべき必須単語や表現はありますので、大学受験レベルの単語も心許ないような人は単語集が何かを使うべきかもしれませんね。

Q8 TOEFL で培われた能力は、今後こういった場面で発揮されると思いますか？

A TOEFL では様々な分野・領域のトピックに触れることになるので、総合的な英語力を身につけることに役立ちます。iBT ではスピーキングが重視されていて、限られた時間で与えられた問いに応える必要があるので、瞬発力や発想力も鍛えられるでしょうね。資格試験というと「試験のための無味乾燥な勉強」をイメージする人が多いですが、少なくとも英語圏の大学で学ぶ皆さんにとって TOEFL の対策は必要なスコアを取得する以上の意味を持つと思います。

Q9 では、最後にこれから TOEFL を受験する生徒達にメッセージ、アドバイス等をお願いします。

A GC 学部では、SA がある分、他の学部の学生に比べると厳しいなあ・・・と思う人もいるかもしれませんが、将来の自分の姿を思い描きながら頑張ってください。きっと実を結ぶ日が来ます。それから、4年間の中ではいくつもの出会いがあると思います。そのうちいくつかはきっと自分の人生にとって大切なものになります。たくさんの人と言葉を交わそう、オープンな心で出会いや学びのチャンスを逃さないように。

いかがでしたか？ TOEFL に対するイメージが少し覆された人、益々試験への興味が出てきた人、色々いると思います。長谷部先生の貴重な TOEFL への本音を参考に授業、試験共に頑張ってくださいませ！！

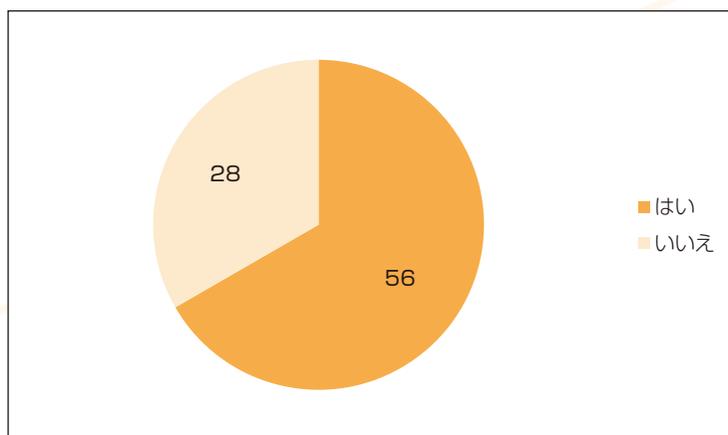
英語コース 1回生 佐藤里奈

少し気になる!?

GC学部生 “TOEFL” の本音!!

SA先決定の為に、GC学部の学生はTOEFLを少なくとも2度受験しなければいけません。1度目の受験でSA先が決まるわけではなく、2度目に出たスコアで決定しますが、試験直前と直後は周囲の意識や勉強法が何かと気になってしまいがちです。そこで、2012年度生の学生を中心に意見、勉強法などを聞かせてもらいました！赤裸々な意見、ユニークな裏ワザ(?)を参考にこれから受験する試験について少し考えてみましょう！！

Q1 TOEFLの試験を受ける際、一回目と二回目では試験に対する意識は変わりましたか？



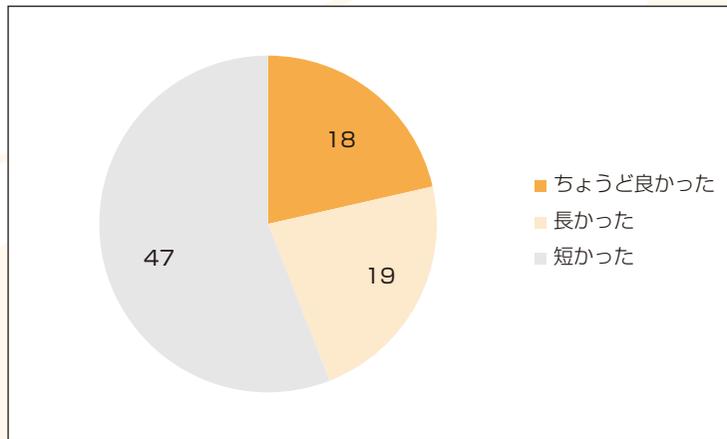
ご覧の通り“はい”と答えた学生が56人で“いいえ”の回答者を遥かに上回っています。一回目と比べて二回目の受験には殆どの学生に大きな変化が生まれているようです。では、いったいどういった意識の変化があるのでしょうか？

Q2 具体的にどのように意識が変わりましたか？

- 1位…心の準備、緊張感が生まれた
- 2位…リスニング問題に対する向上心が生まれた
- 3位…問題のクセがわかった
- 4位…時間配分がわかった

1位“心の準備、緊張感が生まれた”という回答は大多数の学生が回答していました。“二回目の試験では一回目の試験と違ってスコアが取れないと志望している留学先に行くことができない”ことが一番の理由になっているようです。2位の“リスニング問題に対する向上心が生まれた”という回答も多く見受けられました。TOEIC試験経験者である複数の学生は“リスニング問題も含めTOEFLはTOEICよりも遥かに難しい”と回答していました。3位、4位の回答に見られるように1位の回答で“さらに緊張感が生まれる”という意見が目立つ一方で、試験慣れもやはり同時に生まれるようです。

Q3 試験時間についてどのように感じましたか？



半数近くの学生が“短かった”と回答していました。“ちょうど良かった”と回答している人はわずか四分の一ほどです。“リーディング問題を最後まで解くことができなかった”という意見も見受けられました。どうやら時間配分に大多数の学生は苦戦しているようです。

Q4 TOEFL において何かテクニック、コツのようなものはありましたか？又はこうした方が良いというアドバイスはありますか？

- 1 位…問題を解くスピードを速くする
- 2 位…問題慣れするように努める
- 3 位…時間配分に気を付けて問題を解く
- 3 位…問題の選択肢で迷いすぎないようにする
- 3 位…問題に集中する
- 4 位…ボキャブラリーを増やす
- 5 位…文法問題に力を入れる

1 位 “問題を解くスピードを速くする” と答える学生が多く見受けられました。Q2. の回答から見ると納得のいく結果といえるでしょう。2 位と 3 位に “問題慣れするように努める” “時間配分に気を付けて問題を解く” “問題の選択肢で迷いすぎないようにする” “問題に集中する” といった回答がありますが、こういったことに気を付けることが出来れば自然と問題を解くスピードは上がるかもしれません。4 位、5 位には「ボキャブラリー」「文法」に力を入れて勉強したいという強い意欲が見られます。着実に点数を取ろうという意気込みが感じられる計画的な意見です。

Q5 留学中は、試験に向けてどのように勉強したいと考えていますか？

- 1 位…日常生活を通して身に着ける
- 2 位…計画的に問題を解く、勉強量を増やす
- 3 位…ボキャブラリーを増やす
- 4 位…授業を通して勉強する
- 5 位…演習問題に取り組む、Reading 問題に取り組む

1位は“日常生活を通して身に着ける”でした。留学として海外で暮らす経験は日常生活でさえ大きな価値があるということでしょう。ホストファミリーや大学の先生、クラスメートと積極的に話したい”という積極的な回答が見られました。2位の回答は“計画的に問題を解く”“勉強量を増やす”でした。留学先では、現地の大学でのホームワークも多く出されることが大学によっては考えられるので必然的に“勉強量を増やす”という結果につながるのかもしれませんが。4位の“授業を通して勉強する”という回答も留学先では使用言語が完全に英語になる為、大変貴重な学習法であり、同時に良い経験とも言えるでしょう。

Q1からQ5まで様々な意見が揃いました。TOEFLの問題セクションごとの個人の得意、不得意もあり、そういった相違が様々な回答結果に繋がったのかもしれませんが。しかし、どの回答にも見られる共通点は“SAに対する意欲”でした。大学に入学して間もなく全員が受験しなければいけない試験と聞くとTOEFLは少し重荷に感じられます。しかし、それ以上に大学での学びは貴重で、今までとは違った希望にあふれたものなのかもしれないと考えさせられる結果になりました。

★番外編 少しユニークな回答コーナー・・・・・・・・・・・・・・・・

Q4 TOEFLにおいて何かテクニック、コツのようなものはありましたか？又はこうした方が良いというアドバイスはありますか？

A… “メガシャキを飲む” “リポビタンを試験前に飲む”

いわゆる試験前の“願掛け”ですが、気合を入れて頑張るという意味で、時には勝敗を分ける場合も考えられます。個人によって“願掛け”の為の食べ物や飲み物は異なりますが、詳しく調査をすると意外と多い回答なのかもしれません。

Q5 留学中は、試験に向けてどのように勉強したいと考えていますか？

A… “ストラクチャーで間違えた問題をルーズリーフに書き出す”

具体的且つ計画的な回答です。何も考えずボンヤリと問題を解き、答え合わせをしているだけでは自分の弱点をつい見逃してしまうことがあります。ルーズリーフにその都度書き出しておけば後から効果的に見直すことができます。大変効率的な学習法といえるでしょう。

入学後、新しく手にする分厚いTOEFLの教科書に多少の恐れの念や威圧感を感じてしまう学生もいると思います。しかし、一度しかない大学生活、そしてSA。TOEFLを頑張ることも充実したキャンパスライフにはとても重要なはず。中途半端な頑張りや後悔だけはしたくないですね。先人の声を胸に、しっかりと目標を高く持ってこれから頑張っていきましょう!!

～ The best wishes for your future!! We know it will be a bright one! ～

英語コース 一回生 佐藤里奈・廣江華蓮

英語の検定試験は

TOEFLだけじゃない!!

英語コースのみなさんに必要な検定試験は TOEFL だけではありません。イギリスの VISA (入国査証) を取得するためには IELTS という試験で一定水準のスコアを出す必要があります。カナダの一部の大学 (Vancouver Island University など) でも SA 中に IELTS での英語力証明が必要になります。

IELTS とは？

IELTS とは、ケンブリッジ大学が主催する英語力証明のための検定試験で、Reading, Listening, Writing, Speaking の 4section から成ります。受験料は ¥24,675!! 一説には高額な人件費 (Speaking の面接官は全員イギリスのネイティブスピーカー) のためだとか。世界規模で見ると、受験者数は TOEFL よりも多いそうです。

スコアの目安

ここではスコアの目安を示すためにイギリスの VISA における基準を紹介します。

イギリスの VISA を取るには overall (4section の平均) で 5.5 をクリアする必要があります。ただし、これだけでは半年分の VISA しか取得することができません。留学期間すべてを網羅する一年分の VISA を取るためには 4section それぞれで 5.5 を出す必要があります。イギリスでの VISA 更新手続きには半年程かかることもあるため、イギリスに留学を希望される皆さんは是非ともすべての section で 5.5 を取れるようにしっかり準備してくださいね。

試験会場の異様な雰囲気

異様な雰囲気は言い過ぎかも知れませんが (笑) IELTS の会場ではパスポートによる本人確認が要求され、なんとたかが検定試験のために指紋まで採られてしまいます。会場に持ち込めるものがかなり制限されています。

例：飲み物…ラベルを剥がしたペットボトルの水

筆記用具…鉛筆と消しゴム (カバーは外す)

机上に出してはいけないもの…鉛筆のキャップ、鉛筆削り、目薬、ハンカチなど

8 月上旬に学校で受験可能ですが学校での受験はこの一回だけ。時期を外すとこういった規則がよりピリピリと伝わってくる普通の会場に行かなくてはなりません。なじみの人たちと一緒に京田辺キャンパスで受けられるこの一回でクリアするのがお勧めです。

意識調査

IELTS を受験する学生は少なかった (今年は 26 人) ため、身近な仲間も少なく不安を抱えつつ準備をした学生が多いはず! 次世代の GC 英語コース学生のため、IELTS について先輩達に聞いてみました♪

Q1 TOEFL との違いは？

1位……全ての問題が記述式なのでカンで答えられない

(Section を問わず単語を答える問題も多いですし、選択肢問題でも答えを書きます。
例：選択肢 [a] を選ぶ→解答欄に [a] と書く)

2位……Speaking がある

(英検のように面接式の Speaking テストがあって、録音されちゃいます (笑))

3位……総合力が試される

(Listening や Reading の内容が academic な話に限定される TOEFL と違い、多岐にわたった topic が出題されます。Speaking や Writing があるのも理由の一つでしょう。)

4位……Writing Section がある

(Writing では Criterion 並み (それ以上かも?) の文章をその場で、鉛筆の手書きで書かなくてはなりません。試験官の人が鉛筆を研ぎに来てくれるのは大体この Section の前半です。誰かが近づいてきても焦らず問題を解き続けましょう。)

Q2 IELTS に向けてどういった勉強をしていましたか？

1位……問題集を少しやった

(先生たちから告知がありますが7月に行われる IELTS の講習会に参加すると日本英語検定協会から IELTS 対策の分厚い問題集が無料で貰えます！この問題集をやっていた人が多いようです。同志社書籍部でも IELTS 対策問題集はこれを含め2種類しかありません。問題集はこれ一冊で問題ないと思います。)

2位……特に何もしてない

(普段から課題に追われていて時間がとりにくく、やりたくても満足には対策できなかったという人も多くいました。)

Q3 もっとも難しかった Section は何ですか？

1位……Listening

<理由>

- ・問題用紙が分かりにくいから形式が掴めず、進行状況がよく分からなかった
- ・速度が速くてついていけなかった
- ・イギリス英語が上手く聞き取れなかった
- ・メモを取るのに慣れてなくて逆に焦った

(春学期に英語コースで対策してくれる TOEFL-ITP がメモ禁止なので、メモを取る練習をする機会は自分で作らない限りありません。講習会でもらう IELTS の問題集できちんと練習しておきましょう。)

2位……Speaking

<理由>

- ・制限時間が短くて大変だった

(質問ごとに制限時間があり、それを超えてしゃべっていると切られちゃいます。)

- ・対策のしようがなくて困った
(普段から GC の仲間と英語でしゃべる時間を作るといいかもしれませんね。)

3位……Writing

<理由>

- ・短い時間でまとめるのが大変だった
(焦らずに構成を先に考えてから書き出すのが良いとの意見も)
- ・Topic になじみがなくてなかなか思いつかなかった

Q4 コツやアドバイスなど、ありますか？

1位……問題形式に慣れる

(対策をしていなかったため本番で戸惑ってしまった人が多かったようです。)

2位……British English を聞いて listening の練習をしておく

3位……イギリスへの情熱

4位……時間配分に気を付ける

(こちらも一度問題集をやってシミュレーションしておくといいと思います)

おわりに

いかがでしたか？ 聞いた話だと一期生は TOEFL と比べ、IELTS の方が簡単との感想を残された方が多かったようですが、二期生は IELTS の方が難しいと感じた人が多かったようです。厳しそうに見えても普通の英語の試験なので怖がることはないのですが、本番で焦ってしまわないように、問題集をやって、IELTS の形式に慣れておきましょう。

7月に行われる講習会ですが、私個人としては、たとえその時に受ける気がなくても参加することをおすすめします。講習会に行ってもある程度の知識を得ておけば、急に受験の必要が生まれた時にも慌てなくて済むのではないのでしょうか。

8月に学校で行われる IELTS の試験は、イギリスの2校 (University of Southampton, University of Sussex) と、カナダの Vancouver Island University を第一、第二志望にしている方々にとっては特に重要です。そして、受けると決めたからには、私たちの多くがした後悔をしないように (Q3, Q4 参照) 自分が考えられるだけの最大限の対策をして臨んでほしいと思います。

最後になりましたが、日本での IELTS の受験は、英検で有名な日本英語検定協会が実施しています。[IELTS] と検索したらすぐにホームページに行くことができます。もし学校一斉受験の機会を逃してもそのホームページから申し込みますし、IELTS 試験の無料体験版もありますので、ぜひ一度、覗いてみてください。

英語コース 一回生 廣江華蓮

GC中国語コースの先輩への留学体験インタビュー

GC 中国語コースでは2回生の秋学期からの1年間、北京大学、復旦大学、台湾師範大学の3つの大学に分かれて留学します。それぞれの大学に留学中の先輩へ、留学での生活面や勉強面についてのインタビューに答えてもらいました。

まず、上海の復旦大学に留学中している北本先輩、小椎尾先輩、黒岩先輩、家田先輩の4人が答えてくれました。

質問1 中国でおすすめの食べ物や場所はなんですか？

- ・ 食べ物は西红柿炒鸡蛋（シホンスーツアオチータン：トマトと卵の炒め物）、生煎饅頭（シヨンジエンマントウ：日本の肉まんを小ぶりにしたような包子）、小籠包（豚の挽肉を薄い小麦粉の皮で包んで蒸籠蒸しした包子）。好きな地方の料理はウイグル料理、四川料理。好きな場所は田子坊（ティエンズウファン：カフェや雑貨ショップなどが立ち並び上海独特の雰囲気味わえる街）、蘇州（上海の隣に位置し、世界遺産の庭園や麺料理、シルク製品が有名な都市）、杭州（浙江省の省都。西湖で有名な古都であり、秦の始皇帝がここに銭塘県を置いたのが始まりとされる都市）
- ・ 小籠包!!! やっぱ上海と言ったらこれでしょう!! 学校の近くのお店で8個入りのおいしい小籠包が5元（60円くらい）で食べられます。最高です。週に2、3回は食べています。
- ・ お金に余裕がないので、寮の周りの安い店や食堂で済ますことが多いので、これといってすすめられるほど詳しくないです。
- ・ 僕は行きつけのお店があります。そこへ一人で行くと、家族の方との食事に混ぜてもらったりしています。

質問2 日本と違うと感じるのはどんなところですか？生活上で悪い所や良い所はどんなことですか？

- ・ 公共の場所でもとても仲よくしているカップルがたくさんいます。男の人はよく痰を吐き捨てます。大概のひとは電車やバスで他人を先にいかせてあげるということをしません。トイレでも先にゆずるということはありません。友達と遊びに出かけるときは直接知らない人が一緒でも気にしません。（友達の友達とか）
- ・ やっぱり日本がすごく綺麗な街だとつくづくこっちにきて感じます…やっぱり中国人と日本人とは同じアジア人でも価値観とかが全く違うから、それが面白いと感じる時もあるけど、どうしても受け入れられない時もあります。でもやっぱり物価、特に食費と交通費が安いのは生活していてありがたい！これを考えると本当に日本に帰りたくない…。



- ・ラッシュ時には乗り換えするために電車を降りようとしてますが、降りる前に乗ってくる客が多すぎて降りられず、しばしば乗り過ごすことがある。寮では中国人学生がいないため、自分から積極的に友達を作りたがらないと中国人の友達ができない。
- ・上海は大都市なので特に日本と環境は変わりません。悪いところも特に見当たりません。これは人によるとは思いますが……良いところは何もかもが自由なため、選択肢が非常に多いことです。

質問 3 上海で生活していてタブーな話題や行動とはどんなものですか？

- ・私はないと思います。たまに私を日本人だとわかると尖閣諸島の問題を聞いてくる人がいますが、悪意はなく、ただ日本の若者がどんな考えを持つかに興味があるだけだとおもいます。
- ・たぶん GC 中国語コースの学生さんはすでに分かっていることだろうけど、自分からはあまり中国の政治の話の中国人に持ちかけるのはあまりよくない…。
- ・友達と話す場合、タブーなど何もない。いろんな話をしたらいいと思う。
- ・特にないです。政治の話もしていいと思います。

質問 4 復旦大学の留学生はどのようにクラス分けをしましたか？他の学生はどんな国から来ていますか？（類似した内容は割愛させて頂きました。）

- ・学校が始まる時、先にテストがありました。一つはネットでの文法問題、二つ目は会話問題で、先生と話をしました。私たち留学生のクラスは A～I まで有ります。同志社の学生は大体 F か G のクラスです。D や H, I のクラスで勉強している人もいます。留学生はあらゆる国から来ており、一番多いのは私達日本人とタイ人で、さらにイタリア人、スペイン人、ドイツ人、アメリカ人、ブルガリア人もいます。
- ・留学生の中には欧米系、ヨーロッパ系、東南アジア系…本当にいろんな国の人がいます！けれども、私たちのクラスになると華僑の学生さんが多いように感じます。
- ・私のクラスではアメリカ、ドイツ、イタリア、トルコ、フランス、日本、ロシア、アルゼンチン、スペインからの学生がいる。韓国人、日本人は基本的に多い。
- ・短期留学（一年以内）では 3 分の 1 が日本人で、残りは世界中から来ています。とはいっても華僑の割合はやはり多いですが……長期留学（4 年）ではほとんどが韓国人です。（すべて直感です。）

質問 5 中国に来てから中国語はどれくらい上達しましたか？

- ・私の中国語能力はまだ低いと思いますが、リスニング能力は以前に比べてかなり良くなったと実感しています。ただ上海に来てからまだ HSK（中国政府公認資格）のテストを受けてないのでどれくらい上達したかははっきりわかりません。
- ・自分ではまだそんなに感じてないけど、日常生活で街の人が話している中国語は大抵聞き取れるようになったのが一番の進歩でしょうか…お店の人とおしゃべりしたりするのが楽しいです。
- ・リスニングの授業は来た当初は 1 割もわからなかったが、今は 7 割ほど聞き取れるようになった。一方話すほうは授業だけではなかなか進歩しないと思う。なかなか言葉が浮かばなくて、もどかしいとよく感じる。
- ・2・3 か月で HSK のリスニングの点数が 60 点上がりました。

質問 6 中国語の他にどんなことを学んでいますか？

- ・ 中国語の必修科目以外にいくつかの中国語に関する授業があります。しかし私がこれらの授業がある事を知った時にはもう登録に間に合いませんでした。なので、次の学期にそれらを学ぼうとおもいます。
- ・ 授業はまだ中国語の授業しか受けていません。次の学期からは中国語以外の授業も受けてみようと思います。
- ・ 授業では中国語しか学んでいない、実生活の中で中国人と日本人の違いを体験している。クラスメートとの会話で、中国以外の文化についてもしばしば話す。
- ・ 授業は中国語だけです。他は語伴（言語を勉強するために、お互い助け合って交流する友達）と本を共有してビジネスケースを議論したり、お互いの政治や経済について話したりします。物価が安いので、日本ではなかなか経験できないこともこっちでいろいろ経験しています。

質問 7 休みの日は何をして過ごしていますか？

- ・ 週末はいつも友達と一緒に一日旅行に行きます。行くのはいつも上海の近くで、例えば、蘇州や南京、無錫です。もしくは中国人の友達と一緒に遊びに行きます。中国人は普段とても忙しいので、週末しか空いていません。
- ・ 最近は一人でもまだ行ったことのないところに行ったり、こっちでできた友達と遊びにいったり、ご飯を食べに行ったりしています。
- ・ 最初の3か月は旅行や買い物などで外出することが多かったが、最近は野球部に入り練習に週3~4のペースで参加している。
- ・ 中国人を誘って外に出かけることが多いです。国慶節は北京に行きました。

質問 8 この留学でどんな事をしたいと思っていますか。予定や目標等教えてください。

- ・ 必ず HSK 6級に合格したいです。あと、今まで中国人と交流する機会がそんなに多くなかったので頑張ってたくさんの中国人の友達を作りたいです。
- ・ まずは中国語をしっかり身に着けたい。そして中国語で自分の言いたいことを正確に言えるようになりたい。
- ・ 上海が第二の故郷と思えるように、友達をたくさん作る。その友達とたくさんの思い出を残すことができるように、そのために中国語をマスターしたい。
- ・ 中国人の彼女を作ることです。



次に、台湾師範大学留学している橋本先輩、福岡先輩の2人が留学での生活面や勉強面についてインタビューに答えてくれました。

質問 1 なぜ台湾師範大学に留学しようと思ったのですか。

- ・ 元々台湾のドラマや音楽が好きで、その人たちの言っていることを理解できるようになったから。あとは繁体字が好きだから。
- ・ 一つはおばあちゃんが台湾人で、小さいころに来たことがあり、また行きたいと思っていたから。もう一つは一年過ごすということで、気候の面で台湾が一番過ごしやすと感じたから。

質問 2 日本での授業と、台湾師範大学での授業の違い(良い点または悪い点)を教えてください。

- ・ いい点は少人数授業なこと。最高でも8人なので話す機会も多いし、人数が少ないからその場で先生に質問すれば先生も答えてくれる。悪い点は同志社の授業のように講読、作文、会話などがなくひとつの授業しかないこと。ひとつしかないの中国語が進歩しているのか、いまひとつわかりません。
- ・ こちらは基本的に一日3時間の語学授業と、あとは大教室での2時間の選択授業があり、いい点は、毎日同じ時間しか授業がない分、時間が多くあり、また計画も立てやすく、時間を有効に使えるところであり、悪い点は語学以外の授業が少ない分、歴史や文化などの面は自分で勉強しないとなかなか勉強するのは難しいというところです。



質問 3 台湾でタブーの話題や行動は何ですか。

- ・ 個人的にタブーの話題はないと思います。台湾人の友達に日本統治時代のことを聞いたこともあるけど、丁寧に答えてくれました。行動は、MRT（日本でいう地下鉄）の中での飲食。改札くぐったら飲食禁止なこと。ガムとか無意識に噛んでいることが多いので気をつけるようにしています。
- ・ 特にはないのですが、あまり大陸のほうを持ちあげるような発言をすると嫌がられるので、そこは気を付けたほうがいいです。

質問 4 今までで一番印象に残った文化体験は何ですか。

- ・ 教科書のレベルによっては学期に1回郊外学習があります。そのときに都会から離れた田舎に行き、藍染めをしたことです。学校全体のイベントとしてもたまに郊外学習があるので積極的に参加すれば結構文化体験はできると思います。
- ・ ドラゴンボート体験は結構面白かったです。

質問 5 中国語の他に、勉強して身につけた能力は何ですか。

- ・ コミュニケーション能力。よくいろんな交流会や食事会に参加するのですが、普段学校で台湾人の友人ができない自分から話しかけなければ台湾人の友達がなかなかできません。そして中国語を話す練習をするためには会話が続かなければいけないので、4 か月たった今その人その人にあったコミュニケーションの取り方がある程度できるようになったかなあとは思っています。あとはリスニング力。こればかりは日本で鍛えるのに限界があると思います。日本語が話せない台湾人も多いので、いかに自分の知っている単語を聞き取って相手の言っていることを予測するかも結構重要だと思います。

質問 6 SA を終えて、同志社で学ぶ残りの時間で何をしたいですか。また卒業後は何をしたいですか。

- ・ 今はとりあえず話す力を伸ばしたいので、帰ってからは再び文法を重点的にやりたいです。卒業後の進路もまだ漠然としか決まっていないので残りの SA の期間で考えたいと思います。

質問 7 台湾でのおすすめの食べ物や場所を教えてください。

- ・ 夜景がめちゃくちゃ綺麗なので、淡水や陽明山。あとは 101 の展望台もぜひ。西門町は学生の町と言われているだけあって学生だらけ。映画館もあるいろいろなものが安いです。韓国のコスメショップもたくさんあります。食べ物は、小籠包、牛肉麵（煮込んだ牛肉とスープ、小麦の麺からなる麺料理）、水餃、ワンタン、魯肉飯（ルーローファン：台湾の煮込み豚肉かけ飯）、涼麵（リャンミエン：冷やし中華のようなもの）、麻醬麵（マージャンミエン）麵に胡麻だれと野菜を乗せた料理）などなど。他にも書ききれないくらいたくさんあるけど食べ物は本当においしいです。色んなところに行って色んなものを食べてほしいです。
- ・ 場所としては、太魯閣がきれいでお勧めです。食べ物は牛肉麵とかはおいしいです。



質問 8 台湾では、どんな日本のお土産が喜ばれますか。

- ・ 日本のものは大抵台湾でも買えるので日用品などは必要ないと思います。せっかく京都にいるので（台湾でも京都は有名です）、京都ならではのものを買っていったら喜んでくれるのではないかと思います。

質問 9 寮生活について、楽しい点（または困った点）を教えてください。

- ・ 楽しい点は、一人じゃないこと。ルームメイトがいるから精神的に辛いときはこっそり支えにさせてもらっています。あとはルームメイトがいるから頑張ろうと思う。怠けがちなときでも、ルームメイトが勉強しているから自分もやらなきゃ、とルームメイトの存在が刺激になります。

- ・まず声を大にしていいたいのは寮ではないということです。留学生との交流などは一切できないということは結構大事なことです。楽しいことは、はっきり言ってないです。いい点と言えば、学校のすぐ後ろですし店が多いので、立地はかなりいいです。困る点は、一緒に来た日本人と同じ部屋で一年を過ごすということで、部屋で中国語を話す機会はないです。それから門限があるので、泊まらせてくれる友達を見つけないと間に合わないときがあり、かなり大変なので覚悟しておいたほうがいいです。

忙しい中、インタビューに応じてくれた先輩方ありがとうございました。

留学では、普段テレビや新聞で得る情報のようにメディアを介した情報ではなく、何もかも直接接触することができ、自分でも考える機会がもっと増えます。現場の先輩方の意見を聞いて、これから留学を考えている人や留学先に迷っている人は、是非これを一つのヒントとして考えてみては、と思います。

中国語コース 一回生 小島 怜
中国語コース 一回生 澤井悠哉

北京大学留学生

スピーチ・コンテスト体験談

最後に、北京大学に留学中の後藤先輩が、留学生スピーチコンテストで入賞しての感想とともに、留学体験について教えてくださいました。

みなさんこんにちは！私は現在北京大学に留学中の同志社大学二年生、後藤友莉と申します。今回この場所をお借りして、私の留学生活の一部をご紹介しますと思います。

私たちGC学部の学生は、北京大学对外汉语学院という学部で日々中国語を学んでいます。この对外汉语学院では時期ごとにたくさんの行事が催されます。例えば9月のレセプションパーティや10月の国際文化祭、11月には留学生歌唱大会、12月の文化週間などがあり、留学生がこのような行事に参加できる機会は非常に豊富です。特に今回ご紹介するのは、12月3～7日に行われた文化週間の中の目玉イベント、留学生スピーチコンテストの様についてです。文化週間と



は留学生が中国の文化をより理解し、各国の学生たちと中国文化を通して交流することを目的に設けられた5日間の自由期間です。（この期間授業は行われず、特別な文化講座や体験会などが行われました。）スピーチコンテストとは、对外汉语教育学院で学ぶ留学生約600人程度の学生が全員参加を義務づけられているイベントです。この学部は初級、中級、高級にわかれており、預科生と進修生あわせて合計51のクラスにレベル分けされています。スピーチコンテストの概要としては、文化週間の10日ほど前に、自分の所属するクラスで予選が行われ、クラスで一人代表が選出されます。スピーチする内容は自由ですが、やはり自分の留学生活や異文化体験論など、中国に関係のある話をした学生がほとんどでした。私は当初今回のスピーチコンテストがここまで正式なものと思っていたなかったので（なにしろGC学部に先輩はまだいないので）、良い成績がもらえればいいか、とだけ思っていました。しかし同じ内容を話すのであれば、流暢に発音し、感情をこめて、聞き手に感動を与えられるスピーチのほうが素晴らしいですよ？そこで下書きを覚えながら、いつしか、「まずはクラスの中で一番に選ばれてみたい！」と目標をきめていました。こうして幸運にもクラス代表に選出され、今度は「せっかく手に入れた大舞台の切符、同じ挑戦をするなら、自分の力が世界でどこまで通用するのかを知りたい！」と欲求が湧いてきて、決勝戦の準備は予選の時以上に熱がこもりました。準備は先生がネイティブの中国人がスピーチのときに話す中国語に少しずつ調整を加えた台本を暗記することから始まります。高級クラスのスピーチは6分程度でした。6分間の文章を中国語で丸暗記は難易度が高いと思われるかもしれませんが、元々は自分で書いた内容ですし、一つ一つのシーンを頭の中で物語としてつなげていけば、想像より難しくありませんでした。

スピーチコンテストは合計4日に分かれており、私は高級クラスなので最終日に発表がありました。幸い前半三日間の初級中級クラスの発表をすべて見学することができたので、当日の緊張は適度な興奮程度に抑えることができました。会場は北京大学内のホテルの大広間のような場所で行われ、予想外に正式な場所で観客も大勢いたので、初日に会場の様子を目にしたときは、3日後に同じ場所のあの舞台でスピーチができるという光栄な気持ちと同時に、あと3日後にスピーチを完璧なレベルまで持っていかなければならないという焦燥感が一緒に襲ってきました。会場の下見のほかにも、毎日スピーチコンテストが終わるまで会場に残り、舞台にあがって声の響き方や、ジェスチャーの付け方を友達に見てもらいながら確認しました。自分が望む理想のスピーチと、他人が見るスピーチのギャップを埋めるために、何度も録画したり、録音したりして、本番に備えました。

そして迎えた本番当日、早めに会場に着き最終調整を済ませた後、続々と会場入りしてきた観客やクラスメートと談笑をすることで緊張を紛らわせました。ふだんは常に一緒にいる、大好きな親友も他のクラスの決勝戦進出者として出場していましたが、あくまで私にとっての目標は、他の出場者と比べることではなく、自分史上最高のパフォーマンスをすること。今日この舞台上で自分の話したい内容をこれだけ多くの人に伝えることができる、これだけで十分光栄なことなので、あとはいかにスピーチ内容に心をこめて観客に伝えることができるかだと感じました。こうした自分なりの思いを胸に、私の名前を呼ぶたくさんの友達の声を聞きながら舞台にあがり、スピーチが始まりました。私の内容はここ北京で出会った中国人の友達についてで、あらかじめ彼らを当日招待していたので、スピーチ中に彼らの顔を見ることができて、非常にリラックスできました。

結果、たくさんの友達、そして多くの先生方のご支持と応援のおかげで、第三位に入賞することができました。自分の中でも自分の思いを中国語で正確に表現できたことに、非常に満足感を覚えました。スピーチコンテスト終了後には嬉しい誤算が二つありました。一つ目は翌日の表彰式が想像以上に豪華だったこと。コンテストとは別の北京大学大講堂内で、著名人や歌手などの演出と共に表彰式が行われ、その様子は国営の中国中央電視台でも放映されました。二つ目はコンテスト終了後に学部内での知名度が上がったことです。話したことの無い学生から話しかけられるようになったり、初めて会った先生が私の声を聞いただけで私の名前を言い当てたり、といった機会が増えました。このコンテストをきっかけに、よりたくさんの人々と関われるようになったことが、私にとっての収穫です。

最後に今後北京大学に留学し、私たちと同じようにスピーチコンテストに挑戦する後輩たちに微力ながら少しアドバイスをしたいと思います。日本とは違い、ここ北京では毎日中国語を思う存分話す環境が整っています。まず普段の生活では、たくさん中国人と交流し、聞き取れなかったら何度も聞き返す、分かるまで教えてもらいたいという姿勢をみせることが大切です。中国人の中にはとても親切で、我慢強く私たちの中国語向上を手助けしてくれる温かい人がたくさんいます。今日、日中関係は良好とはいえない状態にはありますが、そんな中私は実際に中国に来て、日本でメディアを通してみてきた中国とはまったく違う等身大の中国を体験することができました。そして今回私がスピーチコンテストで主題に選んだのも、現地で出会った中国人との交流の中で生まれた物語です。ですので、後輩のみなさんにも、ぜひ人との出会いを大切にしてほしいと思います。また、北京大学にはチャンスがたくさんころがっているのです。自分が積極的になりさえすれば、努力次第で結果が出せる場所です。学生は世界中から集まった優秀な人々たちなので学習環境にもきっと満足できると思います。コンテストにあたってのアドバイスは、自分で録音した声を何度も聞いて、暇をみつけていつでも暗誦する練習をすることです。出場者として参加する以外に、司会に挑戦することもできるので、もし選ばれなかったとしてもあきらめずに他のチャンスを探してみてください。

私は日本にいたときから、自分が努力して培ってきたものが、異国の地でどこまで通用するのかを意識して行動してきました。今回このような北京大学の正式なイベントに決勝進出者として参加できたことで、長年の目標を果たすことができましたような気がします。かつこれはゴールではなく、人生の通過点であり、今後の自信の源になることと思います。これからも、この結果に満足することなく、奢ることなく、謙虚に努力を続けていこうと思います！！

中国語コース 2 回生 後藤友莉



外国語で遊びませんか?!

クローバー祭のグローバル・コミュニケーション学部企画

2012年11月3日(土)・4日(日)に開催された京田辺キャンパスの学園祭「クローバー祭」で、グローバル・コミュニケーション学部は知真館1号館210教室にて学部企画を行いました。両日とも、学生はもちろん、家族連れを中心に大勢の来場者に恵まれました。3日は「外国語で遊ぼう!」という企画で、学生の手で企画立案から運営までを行いました。4日は「英語・中国語のネイティブ・スピーカーの先生と話そう!」という企画で、英語コースのNeff先生、中国語コースの楊先生が、それぞれサポートスタッフの学生とともに、楽しい雰囲気の中で英会話や中国語会話を教えてくださいました。

ここでは、3日に行われた「外国語で遊ぼう!」について、企画・運営に携わった学生スタッフが企画の報告を行い、スタッフとしての感想や思いを綴ります。

2012年11月3日に知真館1号館210教室で「外国語で遊ぼう!」が午前(11時から12時まで)と、午後(2時から3時まで)の2回開かれました。この企画は日本人、中国人、韓国人と一緒に協力して、それぞれの国の文字、遊びや会話を考えて遊ぶというもので、文字班・会話班・ゲーム班の三つの班に分けて行われました。

それでは、班ごとにどんな遊びをしたのか紹介します。

文字班

文字班は自分の名前を中国語ではどう書くのか、韓国語ではどう書くのか、またどう発音するのかを教えた後、それぞれの国を代表する絵が描かれてある手作りの可愛いカードにそれを書きました。



会話班

会話班は中国と韓国ではどう挨拶するのか、各国の言語ではどう言うのか教えたり、中国語バージョン、韓国語バージョンで「キラキラ星」をみんなで歌ってみました。

また、それぞれの国では数字をどう数えるのか、手でどう表すのか、そしてどう発音するのかを教えて、一緒にやってもらいました。



ゲーム班

ゲーム班は日本の人気アニメのポケットモンスターの名前を中国語バージョンで書いてある画用紙をみて、日本語の名前を類推して当ててみたり、漢字を日本語と中国語で書いたカードを並べて同じ意味になるカードを探すゲームをしました。



それぞれの班は韓国の伝統的な衣服などがデザインされたお土産を用意して遊びに来てくれたみんなにプレゼントしました。

グローバル・コミュニケーションとは何か？ — 私たちが考えるグローバル・コミュニケーション —

私たちは、この「外国語で遊ぼう！」というイベントを通じて改めてグローバル・コミュニケーションとは何かというその意味を考えてみることができました。イベントに参加した人々に韓国語と中国語で、簡単な挨拶を教えてあげたり、子供の名前をハングルの書き方や中国語の読み方を使って書いて、名刺を作ってあげたり、一緒にゲームをしたりしました。特に、誰でも知っている童謡である「キラキラ星」を一緒に韓国語と中国語のバージョンで歌ったりしながら、私たちはすでにグローバル化を実現していました。

確かに、イベントに参加して短い間にその言葉が覚えられるわけではありません。しかし、これをきっかけに少しでも自分の国と異なる文化を理解し、興味を持つようになってくれたら嬉しいと思いました。

今まで私たちは、グローバル・コミュニケーションの意味の中で一番重要なのは、言語の運用能力を身につけることだと思っていました。

しかし、私たちが思うグローバル・コミュニケーションの意味は言語力だけではありませんでした。今回のイベントを通じて、言語力の向上はもちろん、母国と異なる他国の文化を理解しようとする積極的な姿勢、また、新たな学びを楽しむということも大事だと思いました。

日本語コース 1回生 金 雲喬 (きむ うんきょ)
日本語コース 1回生 李 賢智 (い ひょんじ)

異文化交流について、子供たちから学んだこと

今回のイベントには多くの子供、特に幼い子供たちが参加してくれましたが、私たちは彼らから学ぶことがいくつかありました。子供たちは自分の名前を韓国語や中国語でどのように書くかを知ると、素直に「そうなんだ！」ととても可愛く純粋な姿でそれらを受け入れてくれました。その姿からは初めて触れる言語に対する戸惑いや不安は全くといっていい程見受けられません。外国に対して何の偏見も持たず、そのままその国や国の言葉・文化を素直に学ぶ子供たちのきらきらした目は今も強く印象に残っています。そのような彼らの姿勢を私たちは見習うべきであると思います。

大人たちは教育やメディアなどに影響されがちで、異文化に触れる際に何かの先入観にとらわれ、素直に「異」のを受け入れられないことが多いのではないのでしょうか。それはある意味では自然なことですが、一度そういった自分の価値観や先入観を取り払い、子供たちのような真っ白な心で異文化に触れてみることで、より相手の立場に近い場所からその異文化を感じることが出来ると思います。

異文化に接する態度において、子供たちと成長したわたしたちには、明らかに差異があります。異文化に対して、子供たちの視線と私たちの視線に違いがあることに気づくことが出来るのであれば、その違いから学んで、これからの異文化交流について新しい視点をもつことも出来ると思います。さらには新しい異文化交流の形を築くことが出来るかもしれません。

わたしたちは今回、ある言語とある言語の間にワンクッション何かを挟むことで、異文化・異言語に触れることへの躊躇はかなり軽減されると感じました。今回の場合、ゲームや歌や文字がそのワンクッションの役割を果たして、そのワンクッションのお陰で、文化を通しての、または文化を超えた「人間同士」の交流が出来たような気がします。ワンクッションは摩擦を緩和するのみならず、人間と人間をつなげていく「糊」のような役割も果たしています。世界のレベルでは、日本での韓流ドラマやK-POP・C-POP ブームや、外国での日本のマンガやアニメの流行がその「効能」を示しているのですが、今回は小さなレベルで、文化交流の大切さを再確認ができたような気がします。文化を通して交流することはある国のことを知るための大きなきっかけなのではないのでしょうか。

このように、今回のイベントは私たちにとっても異文化交流を考えるヒントとなる、大切な経験となりました。

中国語コース 1回生 片井美歩

日本語コース 1回生 朴 炫宣 (ぱく ひょんそん)

「個人」という単位から見える国際交流

今回の企画は日中、また日韓での領土問題がマスメディアを通じて大きく報道されている最中に準備が行われていた。そのような中で日中韓それぞれの国の学生が意見を出し合い、協力し合うことによって、事が順調に進められ、クローバー祭の本番も大成功を収めることができたのは本当に良かったと思う。また、当日は教室内で日本語、中国語、韓国語の三カ国語が元気よく、常に飛び交っており「これぞグローバル・コミュニケーション学部！！」と思わせるような国際色に染まった雰囲気醸し出されていて、来場していただいた方々にもこの企画には非常に満足していただけたのではないかと感じている。

一方で、日本人の多くは連日報道されるテレビや新聞、雑誌を通して、またインターネット上のホームページを閲覧して入手する外国の姿をそのまま捉え、外国に対して偏った見方や考え方をしてしまうことが多いのではないかと感じる。ここで日本人があまりよく知らない事実を紹介する。2011年3月11日に発生した東日本大震災で隣国の韓国が日本に対して多くの国民が協力して募金活動を行っていたことをみなさんは知っているだろうか。韓国の大手放送局3社(KBS,MBC,SBS)は震災募金のため特別番組を編成したり、番組内で募金を呼びかけるテロップを掲示することで、募金活動を行った。また、多くの学生たちや市民のボランティアによって学内や駅の前で「私たちの隣人、日本を助けてください」と書いてあるプラカードを持って募金を呼びかけた。結果、韓国史上最大の募金額 1,200 億ウォン（日本円で 120 億円相当）が集められて日本に寄付された。しかし、この事実は日本のマスメディアでは全くといっていいほど報道されなかった。この一例をとって考えてみると、日本人が外国に対して感じるはずである《良い印象》が報道の仕方によって感じ取りにくくなっているといっても過言ではないだろう。

では私たちはマスメディアの影響をどのようにして軽減すればいいか。それにはまず、マスメディアの報道を通して見ていた外国の姿が全てではないということを知ることが大切だ。そして今回の企画のように生身の外国人と触れ合うことで外国人を「マスメディアを通して見る国の象徴だ」と捉えるのではなく一人の人間として、すなわち「個人」であることを認識することも重要である。今回のイベントで来場者の方々が人情味のある外国人の姿を感じ取っていただけたならば、この企画は大成功を収めたといえるといえるだろう。

現在、日本、中国、韓国の「国」という大きな単位では確かに各国が政治上、外交上でお互いに問題を抱えているかもしれない。しかし同志社大学グローバル・コミュニケーション学部の中では人と人との繋がり合い、関わり合い、つまり「個人」という単位で日中韓の友好な関係が存在していることをこの企画に関わった学生は全員が実感できたに違いない。今後もグローバル・コミュニケーション学部における様々な活動、交流の場を通して各国の学生同士の絆が益々強固なものになっていくことを期待している。

中国語コース 1回生 西河貴康

日本語コース 1回生 車恩美（ちゃ うんみ）

編集後記

Cosmos 第2号の編集が佳境を迎えた時期、アルジェリアで日本人社員がテロに巻き込まれた事件や、中国との軍事的な緊張が高まりかねない問題が相次いだ。2013年が始まって1か月あまり、世界を舞台に活躍しようとしている学生や、彼（女）らを支えるご家族の出端を挫くかのような出来事が次々と起きている。

そのような国際社会の厳しさ・冷酷さとは一線を画し、本号は、世界の人々の持つ優しさ・温かさで満ちあふれた内容となった。日本語コースに所属する中国人・韓国人が関わったエッセイやコラム、対談からは、日本人の何気ない行動様式に対し、意外な価値を見出していたり、逆に警鐘を鳴らすかのような記述も見られた。これほど率直に語ってくれるのは、日本を深く受け入れてくれているからこそだと思う。このように、日本を温かく受け入れてくれる人々は近隣諸国をはじめ、世界中にいるということを我々日本人は忘れてはならないだろう。

そして、このような人々の支えによって、Study Abroad が成り立っているということも忘れてはならない。本号では滞在先の学生からの多くのメッセージを掲載することができた。いわゆるカルチャーショックのみならず、絶好の機会を生かして着実に成長している姿もうかがうことができた。また、海外での生活を通じて日本のよさを実感したといった趣旨のメッセージが個人的には心に響いたが、読者諸氏はどうお感じになっただろうか。

「グローバル・コミュニケーション」とはまさに、様々な側面を持ち、限らない広がりをもつ「宇宙 (cosmos)」なのかもしれない。本号を通じて、新たな「グローバル・コミュニケーション」を発見していただければ幸いである。(SJ)

2012年度 *Cosmos* 編集委員会

英語コース	廣江 華蓮・河上 晴香・奥雲 茜・大附 加奈・佐藤 里奈・山田 春菜
中国語コース	後藤 友莉・小島 怜・西河 貴康
日本語コース	劉 瀟瀟・倪 暁剛・車 恩美・金 雲喬・李 賢智・朴 炫宣・呉 賽・周 林京

グローバル・コミュニケーション学会 運営編集委員会・役員会

Bettina Gildenhard・窪田 光男・Peter Neff・須藤 潤・内田 尚孝・郭 雲輝・山本 妙

Cosmos 第2号

2013年3月15日発行

発行 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部内
Tel (0774) 65-7491 Fax (0774) 65-7069

編集 2012年度 *Cosmos* 編集委員会
グローバル・コミュニケーション学会 運営編集委員会

印刷 株式会社あおぞら印刷
〒604-8431 京都市中京区西ノ京原町15

